

希望の大地の戯曲

# 北海道 戯曲賞

平成28年度受賞作品集

主催／北海道舞台塾実行委員会（北海道、公益財団法人北海道文化財団）

希 望 の 大 地 の 戯 曲

# 北海道 戯曲賞

平成28年度受賞作品集



## 目次

### ■優秀賞

「Sの唄」

作・藤原佳奈

1

### ■優秀賞

「海の五線譜」

作・吉田小夏

35

選評

85

平成28年度「希望の大地の戯曲」「北海道戯曲賞」の概要

92



優秀賞

# S の唄

藤原佳奈

登場人物

平松凜子

## あらすじ

とあるライブハウス。

舞台上に酒を片手に現れた歌手の女は、

今日が最後のライブになるだろう、と告げる。

女は、生い立ちから語り始め、

やがて、Sとの出逢い、Sと過ごした時間について

言葉を紡いでいく。

誰にも語る事がなかった、思い出を。



ライブハウスの舞台。

舞台上真ん中にはマイクスタンド。

女、酒を持ってステージに現れる。

酒を一口飲み、会場の客を見渡す。

あ、あー、あー。(マイクの音を確認する) えー、

どうも、どうもー、こんばんは。平松凜子です。

会場の客から声援があつたらしい。そちらに視線を送る。

平松凜子です。どうもありがとうございます。

凜子、酒を置く。

この場所、分かりにくくなかったですか？

大丈夫ですか。えー、みなさま、

本日は、お越しくださいますして、

ありがとうございます。実はですね、

ご存知の方も中にはいるかもしれませんが、ここは、私にとって、とても特別な場所、なんです。

今からもう……7年前、になるのか。

人生で初めて、人前でライブをしたのが、この、

ライブハウスでした。高校三年生、18歳の時ですね。

あの、今もやってるのかな、このライブハウスで、オープンマイクっていうイベントがあつて、もう、ほんとオープンに、

誰でも出れちゃうっていうイベントなんですけど、来た人順、エントリーした人順で。

その日は平日だったんですけど、

学校の創立記念日でちょうど休みで、電車で、

3時間かけて東京に来て、一人、持ち時間20分で、

もう、ジャンルもばらばらばらの人が集まって、

っていう感じなんですけど、

ちょっとがんばって早く来すぎちゃったから、

一番初めにやるってことになっちゃって。

もう、ほんと緊張して。あー、かっこつけて

渋谷とか来るんじゃないかって。地元の前、

もっと薄汚いところでやればよかったーって。

後悔しつつ、パニックで、え、なんか、あれだよ、

ライブってMCとかやるんだよね、って、

なぜか自分が歌を始めた理由とか語り出しちゃって、

今思い返すとかなりイタい感じなんですけど……。

しかも色々弾こうと思って準備してた曲、

ド頭からもう、頭バーンって、

真っ白になっちゃって、で、もう、

全然弾く予定がなかった歌、歌っていうか

歌詞もないような歌を歌っちゃって……。

そんなわけで、ここは、私にとって、

すべての始まりの場所。とっても大事な場所、

なんです。はい。で、それでですねー、

こうやってほそぼそとやってきたわけですが、

実は、今日のこの、ステージが、

最後のステージ。はい、そうなんです、

サラッとUNCHAIYAMAしちゃいましたが、最後、にしようと、

思うんですね。で、まあ、最後ってことで、えっと、

ちょっとね、お話をしようかなあ、って思ってる。

凜子、酒を持ち、

私の生まれは、山梨の、長野との県境にある、

田舎まち、です。

で、いきなり生い立ちから語っちゃいますけど、

うちは、田舎っていても、すんごいもう、

山あゝ田んぼゝおじいちゃん、牛ゝみたいなの、

そこまでじゃないんですけど、

田んぼはチラホラしつつ、

チェーン店は近くに一応そろってるような、

そういう、まち、でした。

私の家は、ごく普通の家庭で、

金庫を作るメーカーに勤める父と、

音楽の先生をしていた母の元で育ちました。

私には5つ上の兄がいたそうなんですけど、

2歳の時に心筋症で亡くなったらしくて、

父も母も、次は失敗しないように

という思いがあったのか、絵に描いたような、

良い家庭を作ろうとしていたようでした。

厳格な家で育った母は、人として、

安くあつてはいけない、

女は、節操が大事だ、美しく生きなさいよ、

というのが口癖で、

そんな母を、古めかしいなと思いつつながら、

しかしそんな母を、美しいと思っていました。

私が中学1年になったばかりの春に母は亡くなって、

それから……

あー、だめですね、

最後のなにここのうしろ話からだと。

ちょっとすみません、今日は最後なので、

無礼講で、ね、景気づけに。

とか言ってる実はさっきも飲んでたんですけど。

はあ、お酒はいいですね。

酒は百薬の長っていいからね。っていうのを、

この前50歳ぐらいのおじさんに言ったら、

続きがあるの知らないの、って言われて。

「酒は百薬の長、されど万病の元。人生は、バランスが大事なんだよ、凜子ちゃん。」  
難しいですよ、

うまくバランスをとってるつもりでも、それが原因でうまくいかなくなることもあるじゃないですか。

そういう、うまく生きていく方法を、学校で、教えてくれてたらなあ。学校。

とくに中学校っていうのは、思春期特有のフラストレーションがふつつつしている場所じゃないですか。

そのふつつつしたものを持て余した人達が、手頃な誰かを標的にして満足する、という文化は、まあどこにでもある話ですけど、

私と同じクラスに、バンソウコウというあだ名がついた女の子がいました。そのあだ名の理由は、毎日中指にバンソウコウをしているから。

バンソウコウがどうしてバンソウコウをし続けるのかは誰も知らなくて、

バンソウコウは、バンソウコウをしているから、

っていうよりも、毎日ベタ、とそれこそ

バンソウコウのように自分の席に座って、何か分厚くて古くて陰気な、罪と罰的な本を読んでいるという印象、どこか一点をじっと見つめるその質感とかが、

ああ、バンソウコウっぽいなあ、と私は密かに思っていました。

そうやって、バンソウコウは確かに清々しい存在ではなかったけれども、ただ毎日自分の席に座って

日々をやり過ごしているだけなのに、いつからか、ふつつつを持て余した人達の、かっこうの標的になってしまっ

て、頭から炭酸水をかけられたりとか、上履きの中に墨汁をヒタヒタに入れられたりとか、血まみれの鳩を机の中に入れられたりとか、

今思い返すと、液体系の仕打ちが多かったな、と思いますけど、まあそういう、不条理な制裁を受ける、

という日々がある時から始まったのですが、バンソウコウは、殴られるでも殺されるでもなく、日々、日課のようにその罰を受けながらも、

彼女の精一杯の非難なのか、

降参の態度なのかは分からないけれど、ただ相手にはジトっと死んだ魚のような目を向けるだけだった、学校。

そこで起きることの、全て！が、人生に降り掛かる、そこで起きることの全て！が、世界の全て！になる、超期間限定ミニmam国家、学校！

俯瞰する、ということはまだ知らない、地べたを這いずる無数の惨めな小鳥達は、

隣の羽の色が、ちょっと黄色い、

と言ってはギャース！と叫び、

隣の羽の色が、ちょっと良い匂い、

と言ってもギャース！と叫び、

隣の者との差異差異差異に、

ビリビリ張ったアンテナは今にもはち切れんばかり、

誰が金の卵を産むか、

睨みをきかせながら臨月を待つ！

クックドゥールドゥー！ 望んだ朝は来ない！

しかし、私は、

バンソウコウへ執拗な制裁を執行する人達に

辟易する以上に、そのあまりにも、あまりにも

不条理な罰を、甘んじて受け入れている

バンソウコウこそイヤラシイ、汚いと感じながら、

ただ、遠くから見えていました。

さてはて、そうしてそんな私のひねた思いが

バンソウコウに伝わってしまったのか、

バンソウコウの中指のまじないの力なのか、

なぜかバンソウコウの次の矛先は

私に向くようになって、いつの間にか、

私を取り巻く空気が変わっていった、

そこから記憶は断片的になってしまいうけど、

正直あまり楽しくない日々が、始まった、学校。

超期間限定ミニmam国家！

一応、我が超期間限定ミニmam国家では、友人、

という暗黙の了解を得ている二人がいたんですけど、

美沙と沙代という名前だったので、

めんどくさいのでまとめ

ミサヨってことにしますが、

環境の変化があった後も、一応、

ミサヨとは依然友人だよねという体裁は

保っていたのですが、だんだん接する機会は減り、

ミサヨ達の、今まで友人であったのだから、

ここは人間として、倫理的に、

友人っぽい感じを継続しなければ

いけないんじゃないかなろうか、という、

かなり及び腰な態度をひしひしと感じつつ、

下校の時だけは一緒に帰る、というような付き合いになっていたある日、

及び腰みさよーずと三人で帰っていると、二人ははじめからずっと私には分からない、みさよーずだけに共通の話をしはじめて、

それはみさよーずチャンネルとでもいうか、みさよーずちゃんねる！ 今週のヒットチャート！

ベラベラベラベラベラベラベラ……第3位！

『美沙と沙代がこの前一緒にカッコいいと話した西中にしなぐさのあの人について！』

ベラベラベラベラベラベラベラ……第2位！

『美沙と沙代がこの前一緒に見て号泣した映画について！』

ベラベラベラベラベラベラベラ……第1位！！

『この前美沙が刺されて、沙代が退治した蚊について！』

ベラベラベラベラベラベラベラ……

くだらない、心底くだらない、

そして私にはふたりが共通言語で語る

あのひと！あの映画！も、殺された蚊？も

わからず、ただ隣を並行に歩くロボットのようで、

一視聴者の私は、へえ、とか、ああ、とか、

なんだ！とか、二人に合わせて

小さく笑ってみたりとか、

ささやかな相槌を挟んでみただけれど、

二人から視聴者の私は見えていないのだろうか、チャンネルを変える権利もないまま、

「あの時ね、」

「うんうんうんあの人ね！」

「そうそうそうあのことね」

「うんうんうんああれね」

「そうそうそうまさしくね」

「うんわかるー」

「わかるー」

「わかるー」と、

リズミカルに展開される二人の会話を、

リズミカルだなあ、餅つきみたいだなあ、

町内会のおじさんとおばさんの餅つきって、

すごい上手だよなあ、べったん、よいしょ、

べったん、よいしょ、べったん、よいしょ、

あのととき、うんうん、あのひとつ、そうそう、

あのこと、わかるー、べったん、よいしょ、

べったん、よいしょ、べったん、よいしょ、

べったんよいしょ、べったんよいしょ、

私はなんだ、ブラウン管の、

もちつきみつめるやややかな♪と

リズミカルに思いながら、

「あもちつきもちつき！」

と意図せず発話してしまった自分の声は、

みさよーずちゃんねるの

餅つきの手をとめてしまった。

訝しげな二人の目線に微笑んで、

あ、なんでもなくって、あれ、あちよっと、

靴ひもほどけちゃったから直すね、ごめんね、

先行ってて、すぐ追いかけるから、と、

しゃがみこんで、ほどけてない靴ひもをほどくと、

みさよーずちゃんねるは、

何事もなかったかのようにまた、

餅つき放送をしながら歩いていった。

靴ひもをほどいてむすんでほどいてむすんでを

何回か繰り返して立ち上がると、橋を越えた、

遠くの方に、ちゃんねる達が見えた。

その背中はいくら遠くに見えた。

二人はもう振り返ることはないだろうと思ったけど、

そうだ、今日は家に帰る前に用事があるんだって、

いっけない、忘れてた！と、

観客ゼロの中一人芝居をして、

目についた石を蹴りながら、一人、橋を渡らず、

川沿いの道を、歩いていった。

川沿いの道を、歩いていった。

唄「川沿いの道」

川沿いの道 石を蹴って歩く

川沿いの道 一人で

川沿いの道 石を蹴って歩く

川沿いの道 一人で

石、石、石、いし、いし、いし

道道道道みちみち

風がさわめく 川沿いの道

だんだん日が沈む 空気も落ちてくる

夕食の匂いがする 肉じゃがの匂い

母の匂い 犬が吠えても《ワンワン》驚かない

川沿いの道 石を蹴って歩く

一人蹴って歩く 蹴って蹴って歩く

石の導く先へ

と、河川敷に人影が見えた。女の子の後ろ姿。

薄い生地ワンピースを着て、川を見つめて、

ただ、立っている女の子の後ろ姿。

泣いているのか、笑っているのかは分からないけど、その背中には、強烈にひきつける何かがあった。

ワンピースは風にそよいで、

ほっそり伸びた白い手足は、

しかし、確かな意志があるようで、

そこに正しく、立っていた。

彼女に何か話しかけてみたい、と思ったけれど、

どう話しかけて良いか分からず、

私は、それまで蹴ってきた石を手につかみ、

そっと階段を降りていって、川辺を二三歩進んで、

川に向かって石を投げた。

川面をかつこよくはじかせようと思って投げたのに、

石は、ぼちゃん、と、

愈けた音をたててそのまま沈んでしまった。

女の子は、私の方を振り向いた。

強い目と、優しい口元、白い肌。

それは、亡くなった母とどこか似ている気がした。

彼女は、私を見ても驚きもせず、

川を見ているときと変わらない様子で、

じっと何かを待っているようで、

私はおそろおそろ彼女の方に歩みよった。

「ああ、石、うまく投げられなかったなあ」

と、口に出た第一声は

なんだか媚びるような温度になってしまって、

慌てて次の言葉を探していると、

「石は、どこから蹴ってきたの？」

と透き通る声で彼女は尋ねた。

どこから蹴ってきたか？だって、

彼女は私が気づいたときにはずっと川を見ていて、

私が石を蹴っているところを

見ていなかったはずなのに。いや、もしかして、

私が蹴っている最中にこちらを見ていたのだろうか。

「ねえ、どこから、蹴ってきたの？」

と、また彼女は尋ねた。

「向こうの、橋のところから。」

それが、私とSの不思議な出会いでした。

次の日学校へ行くと、

みさよーずは、何食わぬ顔で近づいてきて、

「昨日帰りどこ行っちゃったの、急に消えるから心配したよ」とのうのうとのたまった。

二人の口を、餅でいっぱいにして塞いでやりたい

衝動にかられたけれど、

「いやあ、昨日ね、ほどけた靴ひもを

結んでいた時にね、上から鳩の糞が落ちてきてネ、

1羽の糞ならまだいいのよ、なんか

群れの習性なのか、ここぞとばかり

その付近の鳩が私の頭上で糞をしていってね、

頭が糞まみれになっちゃってね、もう、

糞ヘルメット。ティッシュとか持ってなくってさ、

どうしようかなあ、これ困ったなあ、

って思ってたらね、宗教の勧誘のおばさんが、

『あなたは今幸せですか？』て問いかけてきてさ、

『今の今でいうと、若干不幸せですかね、

糞ヘルメットなんで。』て答えたらね、

『それは大変！』って言って、

『あなたに悪いものがついているのよ！』

って言って、とりあえずついているのは

まごうことなき鳩の糞なんだけどね、

強引にアパートの一室に

連れていかれてネ、

何人かで真実の愛についての歌を歌って、

豆のスープごちそうになって、

帰ったんだー鳩ぼっぼー！

と、よくわからないでまかせを言って答えると、

みさよーずは、ぷっと吹き出して、

なにそれ、うける、と言って笑った。

私も、にへらにへらと笑って、ぼっぼっぼ、

鳩ぼっぼー豆が欲しけりゃそらやるぞー

と、歌って、ああ、こうやっておどければ、

大丈夫なんだなあ、と学んだ。

それから私は、Sと会うための口実を考えた。

何か楽器の練習、という名目をつくれれば、

河原に立ち寄るのは不自然ではないのではないか、

なんとも安易な発想だけれど、

私は、父が書齋にしまっていた

埃のかぶったギターを持って、河原へ行った。

Sは必ずそこに居た。

私は、河原に行くたびに、Sについて質問して、

Sはその度に、それに丁寧な答えてくれた。

Sは、学年は私と同じ中学2年生、

音楽が好きなこと、

ピアノを習っていること、

ピアノの先生は少し怖い人なのだということ、

特に好きなのはクラシックで、

ドビュッシーの曲が一番好きなこと、

5つ年下の弟がいること、

川を見るのがとても好きなこと。

それは、流れてる大量の水を見てると、

ちょっとした悩みも、

そのまま全部流れてくれそうな気がするから。

私は、Sに質問をしては、



その答える姿にうっとりしながら、隣に座って、ギターを、ひいた。来る日も、来る日も、ギターをひいた。

唄「河川敷の秘密基地」

私は隣でギターをひく

あなたは隣で目をつむる

その横顔が素敵だと思う

二人だけの秘密の場所

あなたの目はとても強くて

あなたの声はとても優しい

私もあなたみたいだったら

母さん自慢に思ってくれたかな

こんなこと思うのおかしいけど

あなたのその肌で滑り台したい

こんなこと思うのおかしいけど

あなたにの唇にキスしてみたい

小さく膨らんだ貴女の胸に

すっほりと入って眠ってみたい

あなたの声はなぜだか懐かしくて

ここは二人だけの秘密の場所

学校でおどける術を知った私は、

ふつつ軍団たちの標的から外れ、

みさよーずの及び腰態度も解消され、

むしろ友人は増えていったミニマム国家。

にへらにへらと笑うことは上手になったけど、

心の外側を使ってる感じ、

誰か人はいるのに、誰もいない感じ、

肉体が集合している国家のはずなのに、

虚しいゴンドラに乗って、

毎日が過ぎていく感じがした。

河原で会うSだけは、いい匂いがした。

高校になって、人が変わって、

新しくなったミニマム国家。

国家が変わっても同じ国民となったバンソウコウは、

国家が変わっても依然一人ぼっちだった。

可哀想なバンソウコウ。

でも、それはバンソウコウが選んでいるのだ、

自業自得なのだ。こうやって、こうやって、

こうやって、私の得たおどける術は、

虚しくとも、自由に泳げる浮き輪なのだ。

ある日、Sは私に、「人前で歌わないの？」

と聞いた。

確かに、ギターは練習していたのに、

歌うことは考えていなくて、

Sは、「それじゃ、意味ないでしょ、

せっかくあなたが弾くのは、良い音色なのだから」

と、この上ない笑顔で笑って、

「何か適当に弾いてみて」と、

私のギターのを待ったので、

私は、その日の気候のような、秋が始まって、

風がそよいで、キンモクセイの香りと、家と家の、

夕食の匂いが混じって、爽やかで、

少し寂しい匂いがして、静かにこうして、

Sと、一緒にいるところを思って、弾き始めた。

Sは、私のギターに合わせて、口ずさんで、

私も、それに合わせて、口ずさんで、

Sの声と私の声が響いて、一つになる感触、

Sの声と、私の声の波が一緒になって、

頭の奥の方がワーンと響いて、

この辺りの空気の中で、

私とSとだけが混じっているような感じが、

すごく気持ちいいなあと思って、

昔、ピアノを弾く母の隣で、

歌ったことを思い出したりなんかして、凜ちゃん、

いくよ、せーの、に合わせて歌い始めたこととか、

鍵盤を動く母の指を思い出しながら、歌って、

Sの歌に合わせて、歌って、

で、そこから、Sと一緒に歌を歌うようになって、

はい、で、こうやって、一度、

人前で、歌ってみようと思って、はい、それが、

歌を始めたきっかけでした…

(声が裏返る) はい、なんかすみません、

変な話しちゃって…

えっとー、今日は平日なんですけど、

ちようどうちの高校が創立記念日で、

休みだったので、バスと電車で、

3時間くらいかけてやってきました、

わー(手を振る) 高校の友達もきてくれます。

ちよっと早く着きすぎてしまっって、はい、

なので私が、一番になっちゃって、

えっと、渋谷は、人が多いですね、東京は、

母が昔住んでいたところで、二回だけ、

来たことがあります、でも、渋谷は初めて、で、

母は練馬区?の方だったので、とか言って、

練馬と渋谷がどれくらい離れてるかとか

知らないんですけど、え、っと、あ、

なんか話すのが長くなってすみません、

すみません、すみません、なんか、すごく、  
上がっちゃって、  
はー……。

えーっと、(合図に気づいて) え、あと、10分？

わ、大変だ、歌わずに終わっちゃう、

え、っと、はい、えーっと、じゃあ、やります…

タイトルは……。

(歌い出そうとするが、忘れてしまった様子)

「あの時、一緒に歌った、あなたの歌」、です。

凜子、ハミングのような歌を歌う。

どうも、ありがとうございます。

これは、私が生まれて初めてのライブで、

この場所で歌った歌でした。

散々なライブをしてしまった、と落ち込む私に、

Sは、すごく良かったよ、と言ってきて、

あなたの声は、とても素敵だから、きくと、

もっと歌った方がいい、と言ってきて、

これからも、また、一緒に歌を作ろう、だから、

素敵な歌、歌ってね、と言ってきて、家にいても、

学校にいても、些細な毎日に、何をやってても、

確かだなあ、って思うことは無かったけど、  
手触りなく、ぼんやり過ぎていくだけだったけど、  
Sと一緒に歌を作って、こうして歌うことは、  
これだけは私が立ってても

大丈夫な場所かもしれない、と、

大げさだけどそう思って、

私は、Sが、素敵だと言ってくれるような、  
歌手になろうと決めたのだった。

東京の音楽大学に行くと言ったSの言葉を聞いて、

私も、東京へ行こうと思い、高校三年の冬、

父に「東京に行きたい」と告げた。

「大学に行かないのか」と父は最初は反対して、

でも、私のしつこさにしぶしぶ承知して、

母さんに恥かかせるような生き方だけはするなよ、

と、ポツリと言って私を見送ってくれた父、を背に、

ギターを一つ抱えて、私は東京にやってきた。

東京！

18歳の田舎者にとって、

東京はまばゆい場所でした。

乾燥したミニマム国家からは、

まるで想像のつかない、

私の知らない、手触りが溢れていて、

目に手に耳に過ぎる全てのものを、を、

目を手に耳に過ぎる全てのものを、を、

ドクドクと飲み込んでいった、東京。

インベーダーゲームのように人を避ける新宿駅、朝の満員電車は、人を押し込む係の人がいて、駅前にはティッシュ配りがすごく上手な

お兄さんがいて、何についてか分からないけどアンケートに協力して欲しいようなおばさんも

たくさんいて、そのおばさん達はたいいていサンバイザーを被っていて、夜には

道ばたで酔っぱらって寝ちゃってる学生がたくさんいて、寝ちゃってるおじさんもいて、

死んでるのかな、ってちょっと心配になったりして、渋谷区と練馬区は、そんなに近くはなくて、

練馬区には昔母が住んでいて、Sが引越したのも、練馬区にある音大近くのアパートで、

私は、Sのアパートから最寄りの桜台駅、の二つ隣の中村橋駅から歩いてすぐのところ、

四畳半の部屋を借りた。引越しをしたその日、

父に送ってもらった段ボールの包みを、一つずつ空けていると、Sが訪ねてきてくれた。

東京で見るSは、いつもより美しく見えた。引越し祝いをしよう、と言って、

Sが持って来てくれたお蕎麦を食べて、その日、

一人で寝るのが寂しくなって、帰るSを引き止めて、四畳半の部屋のほとんどを占めている、

私のベッドで、二人で寝た。Sと、抱き合って寝た。鼻をSの身体に沈ませて、

Sの脇のすっぱい匂いをかきながら、目をつむって、Sの吐息が耳にかかって、

あなたの事がほんとに大事よ、きつと素敵な歌手になると思う、

私がいるから大丈夫よ、あなたはきつと大丈夫よ、と、その声を聞きながら、眠りについた、

とぶとぶと、眠りの海に、落ちて行った……

凜子の言葉、だんだんと歌になり

(名もない唄)

ピンクの海、とろける足元、

深く深く沈んでいって、

ジュースを飲んだクジラの上で、

足の裏はあったかくて、

悲しい人魚姫も笑う、ピンクの海の中、

あなたのこえがきこえる

凜子の名もない唄、だんだんと、唄「あなたのこえ」になる

唄「あなたのこえ」

あなたのこえがきこえる 風がふいたとき

あなたのこえがきこえる カラスが鳴いたとき

あなたの頬を触った 風が通りすぎて

あなたを見て笑った カラスも風の中

はい、という、あなたのこえ、という歌でした。

平松凜子と言います。

名前だけでも覚えて帰ってください。あ、もし、  
気に入ってくださいの方がいらっしゃったら、

えっとー、今度のライブのフライヤーがあるので、  
持っていってください。

あ……

(と、フライヤーを渡そうとするが、貰われない)

あ……

(と、フライヤーを渡そうとする貰われない)

あ……そこに座ってらっしゃる方、

今、聞いてませんでしたか？

嘘言わないでください、

この距離だから絶対聞こえますよね。

どうでした、私の歌。

率直な意見が聞きたいんです。はい、なんでも。

……悪くないけど、面白くない？

面白くない……。

「あなたの声が聞こえる」(ギャグっぽく)

え、こういうことじゃない……？

……面白くない、んだって、私の歌。

あなたと作る歌は、いい歌なのに。

とSに愚痴を言うのと、

凜子は、人生の経験がまだ足りないからよ、

私の学校の先生もよく言うのよ、

音楽にはその人の人生の全てが出るって、

なるほどと、Sに言われたのをきっかけに、

その時働いていたコンビニを辞めて、

片っ端から色んなアルバイトをすることにしました。

居酒屋、ホテル、ビルの清掃、新聞配達、海の家、

製麺工場、受付、携帯ショップ、交通整理、

試食販売のお姉さん、カメラ屋、下着屋、葬儀屋、

花屋、レンタルビデオショップ。

いらっしやいませ、いらっしやいませ、

いらっしやいませ、へいらっしやい！

黙々と、働いて、その間に、歌います、らら〜♪

お一つどうぞ、はい喜んで！  
なるほどですねー、らら〜♪

ハッハッハ（何か作業してる）、らら〜  
ホッホッホ（何か作業してる）、らら〜  
色んなバイトをしたけれど、

「店長、お皿ですか？ はい、数えました！  
はい、38枚ありました！」

「えっ、37枚しか……ない……？」

「……あの、店長すみません、私……辞めます！  
この店辞めます！ 私、向いてないみたいで。

すみませーん！」

「いらっしやいませ、試食いかがですか、はい、  
どうぞ。え、もう一つ？ どうぞ、どうぞ。

え、もっと？ どうぞどうぞどうぞどうぞ、

ありがとうございます」

「すみません派遣会社の中島さん。

今日の試食ですが、店の売りもの、

食欲旺盛なおばさんに全部食べられちゃいました、

はい、ありえないおばさんですよね……え、

私がありえない？ あ、すみせん中島さん、私……

辞めます！ この派遣会社辞めます！ 私、

向いてないみたいで。すみせん、

本当にすみませーん！」

「いらっしやいませ、ええ、そうですか、

いらっしやいませ、はい、こちらにご記入……ああ、

そうですか、そんなことがあったんですか、  
いらっし……わーすごい、

それは晴天の霹靂ですね〜。」

「すみせん社長。同じシフトの榎原さんの話が  
つまらないので、私……辞めます！

この会社辞めます！ 私、向いてないみたいで。

私、やっぱり歌じゃないとだめみたいなんです」

色んなバイトをしたけれど、

どれも長くは続かなくて、結局また、

コンビニで働きながら、

いらっしやいませー、ライブをして、

いらっしやいませー、CDを作って、

いらっしやいませー、バイト先の、

いらっしやいませー、バンドマンの、

いらっしやいませー、坂田さんと、

いらっしやいませー？

いつの間にか付き合うことになり、

ライブ、バイト、サカタサン、と、変な、髪型の、

坂田さん、と、鶏みたいな、坂田さん、と、

回し車を走るハムスターのようにただただ、

忙しく過ぎていった。

私は坂田さんの歌う、

朝はご飯よりパンがいい、という歌とか、

ユニットバスは確かに臭い、という歌とかの、自称『ディテールに神は宿るぜ』ソングを、単純につまらない歌だなあと思っただけど、坂田さんは、私の歌を、とても良い、やべえ、りんちゃん、ばねえ、りんちゃんブラボー、りんちゃんマンセー！と言ってくれたので、私も「さかぼんの歌は、味があってグウッッド！」と言った。

坂田さんは、とさか頭の見かけによらず真面目で、バイトの時はちゃんととさかを横にたたんでいたし、見かけによらず優しく、私がライブがうまくいかなくてへこんでいると、りんちゃんの歌は世界一！ マンセー！と、いつも励ましてくれた。

そんなさかぼんにいつもどうやって歌を作ってるのかと聞かれたとき、

よっぽど内緒にしておこうかと思っただけど、実は、S、という音大に行ってる親友がいて、

彼女と一緒に考えてるんだ、と教えてあげた。

さかぼんはSに興味を持って会いたがっただけど、

Sは私だけのものでいてほしくて、私は、

Sは忙しいからな、とか、Sは美人だから、

さかぼんが好きになっちゃったら嫌だからな、

とか言って、断った。

さかぼんのライブを観に行って、

終わった後の楽屋にお邪魔したとき、

そこで、ライブに出てた人、

その友達が車座になって座ってて、

みんなお酒を飲んで、私はコーラを飲んで、

色んな種類の煙草がもくもく煙ってる中、

誰かが吸い始めた煙草が

さかぼんの所まで回ってきて、

さかぼんはそれをしばらく吸って、

りんちゃんも吸う？と、私にまわして、私は、

煙草が吸えないので断って吸わずに隣に回して、

しばらくしてさかぼんと他の人達は、

ものすごいテンションで歌ったり、

暴れたりし始めて、泣いてる人もいて、

あ、あれ、煙草じゃなかったんだ、と思って、

ちょっと怖くなっちゃったなー、私が、

何かされたわけじゃないんだけど、と話す、

Sは怒って、そんな男、辞めときなよ、

その男は自分に弱い人なのよ、

しかも自分だけで楽しむならまだ良いわよ、

それを凜子にすすめるのなんて、

男としてありえない、

そんな男と付き合ってる凜子は私は嫌い、  
と言った。

次の日、私は、さかぼんと、別れた。

唄『はいはいさかぼん』

はいはい さかぼん さかぼんぼん

かなしくはない はずなんだけど

はいはい さかぼん さかぼんぼん

涙がでるな おかしいな

へんな歌 歌って

へんな髪型で

一緒に笑って 楽しかったな

はいはい さかぼんぼん

私の20歳の誕生日、Sと一緒に誕生日会をした。

初めてお酒を、チューハイのレモンを買って、

Sはビールで、一緒に乾杯した。

もう二十歳だね、大人だね、凜子の歌、

早く色んな人に聞いてもらえようにならないとね、

凜子の歌は、私の歌だよ、

私もがんばるから、がんばろうねとSは言った。

チューハイをグビッと飲んで（お酒を飲む）、

じんわり熱くなった胸に、

案外お酒は美味しいことを知って、

そうだ、Sのためにも、

早く立派な歌手にならなければいけない、

そう思って、よりいっそう気合いを入れて、

Sと作る歌を、平松凜子を、

色んな人に知ってもらおうと、

その為には色んな人に会わなくては、と、

二十歳になったのをきっかけに、

お酒を飲む場所という場所に顔を出した。

そうだ、こんな時こそ、おどけが必要だ！

どうもー平松凜子ですーリンリンです、

はじめましてー、ビール1つお願いします！

飲んで、飲んで、飲んで、飲みましょう、

はじめましてーどうもーはじめましてー、

富の宝山水割りで（マジな声）はい、平松凜子です、

ブログもやって、

『平松凜子の歌はnight!』です。

歌はNight!です。え、タイトルがひどい？

そんなことNight!

あ、水割り濃いめで。（低い声で注文する）

まあ、読んでください、携帯から見れますよ？

『7月28日。今日もSと歌を作った、夏にびったり



の歌ができたので、今度ライブでお披露目します。』

そうなんです、このSって子と作ってて、  
歌詞と曲を一緒につくって、私が歌って。

どんな歌歌ってるかですか？

あ、次ロックで。(低い声で注文する。)

あ、歌ってるのはロックじゃないんですけど、  
じゃあちょっと歌ってもいいですか？

“あんの頃は、ハッ!”

いや、違いますよ、これは人の歌ですよ、  
ちょっと酔ってるんで、

本物聞きに今度ライブに来てください、

あー、足元がなんだかふわふわするなあ、

あ、これ三軒目ですか、あなたはどなたでしたっけ、

高井さん、音楽プロデューサーの？ 高井さん、

髪型がなんかホストっぽいですねえ、あれ？

高井さん？ ここはどこ？ 歌舞伎町？

高井さんがホスト？ あれ？

(以下ホストクラブのコール風で)

飲んじゃって〜飲んじゃって、

どんどんどんどん飲んじゃって〜

平松リンリンリンコさん、

ところであなたの年いくつ？

二十歳の歌手の卵なの？

あらあらあら

厳しい世界に

いらっしやいませ〜

いらっしやいませ〜

歌手の寿命はすぐにくる

22までに売れないと

その後惨めに崖っぷち

結局若さが大事なの

女は形が大事なの

f u | w a f u | w a f u | w a f u | w a

厳しい世界に

いらっしやいませ〜

いらっしやいませ〜

売れるに大事はパッケージ

お客のためのパッケージ

あの着ぐるみのあのバンド、

着ぐるみ着てから売れたでしょ？

あの歌手が、売れたのも

おっぱいしてからだったでしょ、

分かりやすさが大事なの

どんな人だか分かりよく、

その人だけだと分かるよな

それは嘘でもかまわない  
他と違えばかまわない

あなたじゃなくてもかまわない

立派な歌手になるために

厳しい世界に いらっしやいませ〜！

高井さんの助言を聞き、

何か、分かりやすく、

人と区別できることをしようと、

どじょうすくいをしながら歌うことにした。

唄「歌を歌うために」

歌を 歌う ために

歌を 歌う ために

私であると わかるように

みんなに求め られるように

歌を 歌う ために

歌を 歌う ために

いないどじょうを いるごとく

つかまえ のがして みせましよう

歌を 歌う ために

歌を 歌う ために

これで いいのかな

これで あってるのかな

ねえ高井さん、私

どじょうすくいであってるのかな

それは、違うんじゃない？と、

Sに言われて我に返りました。

自分を見失うところでした。

それから色々試したけれど、バイトをして、

歌を歌って、時間だけが過ぎるばかりで、やはり、

回し車で駆けるハムスターのように、

私の場所は変わらないまま、

いつか崖っぷちと宣言された年齢を越え、

23になってしまっていた。

Sは大学を卒業して、音楽の先生になった。

きつといい先生になるだろうな、

Sに教えてもらったなら、音楽好きになるだろうな、

と思った、先生になっても、働くのは東京だから、

歌は作るよ、と言ってくれたけど、

いつまで立っても目が出ない私に向かって、

凜子がうまくいかないのは、

頑張りが足りないからだよ、

と飽きれて言うようになった。

Sをおいかけても、おいかけても、

おいかければおいかけるほど、

Sはどんな遠くに行ってしまうような気がした。

実際、Sの肌の色は、前よりまして白く見えた。

もっとももっとも、頑張って、

私とSの歌で、歌を、歌って、それが求められて、

それが、愛されて、そして、

Sが私を自慢の親友と思うような、

早くそういう歌を、歌えるように、

ならなくてはいけない、

ある日、ライブを終えると知らないおじさんが、

私に声をかけてきた。

歌をちゃんと仕事にしたいか、

君は、いい歌を歌うから、

ぜひ一度うちにきてみてと、スカウトをされた。

やっとこの時がきたと、二つ返事で名刺をもらって、

その名刺の会社名は聞いたことがなかったけど、

おじさんはどこかの社長ではあるらしく、後日、

五反田の、面接に指定された場所にいくと、

そこは高級マンションで、インターフォンを押して、

扉を開けると、毛並みの良い、  
もふもふした猫やら犬やらが一斉に近寄ってきた。

部屋の中央のソファにはその社長が座って、

スパゲッティーを食べていて、奥では、

何人かの女の人が食事の片付けをしていた。

その異様な雰囲気緊張していると、社長は、

うちは、正式に歌手を雇っているお店だから、

試しに今日からでも働いてもらおうかなと、

口元を拭きながらそう言って、

奥にいたお姉さんに連れられて、

そこから歩いて5分のところにあるお店にいった。

看板には、クラブショールと書かれていた。

更衣室で、これに着替えてねと渡されたのは、

ほぼ下着、と呼べるような衣装だった。

よく理解ができないまま、渡された衣装を着て、

それから案内されたのは、

どこか昭和の香りたがよう、

鏡ばりのきらびやかな空間、

垂れ下がったシャンデリア、

ネオンのついた水槽には熱帯魚がひしめき、

しつらえの良い黒いソファとテーブルが並んで、

真ん中に突き出した、赤いステージの上には、

私と同じような格好をした女の子達が10数人いて、

歌やダンスの稽古をしていた。  
案内してくれたお姉さんは、

最初は緊張するかもしれないけど、大丈夫だからね、

ここにいる子たちも、みんな歌手だから、

ここで終わろうと思ってないからね、

スマイルスマイル。

色んなお客さんがくるから、歌って、踊って、

ひきつけておいて、後でいいお客さんにつなげて、

自分のこれからもつなげて、スマイルスマイル、

と、つまりは、裸に近い格好で歌って踊り、

あとはお客の酒の相手をする、

ということらしかった、

よっぽどその場で帰ろうかと思ったけれど、

1日のステージの中で、

自分の歌を歌える時間があること、

そしてそれは、店での人気が上がれば上がるほど、

時間は長くなる、という話を聞いて、

それまで、結局ほとんどアルバイトだった時間が、

全て歌になるならと、毎日、自分の歌を歌って、

誰かに聞いてもらえて、

それでお金が貰えるなら、と、働くことにした、

Sにはそのことは黙っていた。

そのお店、クラブショージャーで、

来る日も来る日も、歌い、踊り、

何かを紛らわすようにお酒を飲み、

何かを紛らわすようにひたすらおどけて、

まわされる手を避け、まさぐる手をかわし、

そこだけは、と死守していた、

Sは、女は節操が大事な、と言った。

美しく生きるの、恥ずかしくないように生きるの、

というSの言葉を思い出して、

どんなにお酒を飲んで、どんなにふらつこうとも、

一線だけは越えずに、避けて、避けて、避けて、

飲んで、歌って、飲んで、歌って、

店で働いたお金で、生活をして、

たまにライブハウスでライブをして、飲んで、

歌って、飲んで、歌って、飲んで、歌って、

進んでいるのに、いつまで経っても、

ハムスターは、回し車の中のまま、

おどけることだけが上手になって、

店で働いて、9ヶ月が過ぎた、ある日、客の男に、

タクシーで家まで送ってもらっている、

その日はいつも以上に酔っぱらって、

Sのことをべらべら話してしまっただけ、

私鉄の会社に勤めるというその男、

もちろん既婚の松浦さんは、

優しく私の頭を撫でながら、

Sちゃんと凛ちゃんが作った歌は、

とても良い歌だよ、と言ってくれて、  
雨のタクシーの中、

テールライトが反射する窓の水滴を見て、  
りんご飴のテカテカしたところを連想しながら、  
汗と、お酒と整髪料の匂いのまじった

松浦さんの腕の下で、何か心臓の奥で、  
ブツ、と音がした。

糸がほどけてしまったように、  
そのまま、私は松浦さんと、ホテルに行った。  
24にもなって、男の人と寝たのは、  
それが初めてだった。

初めての、その時、Sのことを思い出した。  
とり返せないシミがついた気分だった。

松浦さんは、私の様子を察してか、  
申し訳なさそうに、またお店に行くからね、  
凛ちゃんのこと応援してるからねと言った。  
嫌悪していたものでも、一度経験をつむと、  
後はどんどん痛みに鈍くなっていて、

身体は汚く、汚れていって、  
鈍麻されるだけなら罪も軽いのに、  
その愉しみも覚え始めて、

私はそれからお客と寝て、寝て、寝まくった。  
いつの間にか私は店一番の人気歌手になっていて、

自分の歌を歌う時間は、毎日30分与えられた。  
歌を歌う時間だけが、確かな時間だった。  
私は毎日ステージに立った。

唄「私のステージ」

マイクの前 ステージに立つ

スポットライトを浴びて

観客は私を求めて

私の歌に酔いしれる 目をみれば分かる

歌はSと作っているの

私はこの店一番の歌手

お客と寝たからじゃない 絶対絶対そうじゃない

だって私の唄はこの店で一番人気がある

実力で勝ちとったこのステージ

ああーああー

スポットライトを浴びて

ああーああー

確かな時間感して

ああー私は 歌で生きる

お店に出ている日、

お客と出身地について話していると、

私の出身を聞いて、

最近人気のあの作家の出身地と同じだね、

彼女も確かK市出身だよ、と、

夏目キワコを知っているか、と尋ねられた。

そのお客飯塚さんは、

出版社に勤める40過ぎの紳士的な方で、

以前にその作家、

夏目キワコの書いた小説を担当したのだと、

誇らしげに話してくれたのだけど、

私はその作家の名前を聞いても心あたりがなく、

次の日、その作家のことが気になって、

本屋へ行き、彼女の本を探した。

確か夏目、夏目、夏目、夏目、漱石ではなくて、

夏目、キワコ、夏目キワコは、作家別の分類に、

きちんと名前が立てられていて、

自分と同じ出身の人で、このような人がいたのだ、

と嬉しくなって、書店員が選ぶなんとか大賞に

選ばれた、というPOPのついた平積み的小説を

手に取って、作者の経歴を見ると、

夏目キワコは私と同じ年齢だった。

胸のザワつきを感じながら、

『かばんの中身』と題された小説のページを、

捲った。

『中指にはめた指輪に、目をつむって、』

そっとキスをする。

それが、私の毎朝の儀式だった

中指には、幼い頃に亡くなった母の、

婚約指輪をしていた。もちろん母は、

その指輪を薬指にはめていたけど、

私は中指がぴったりだった。

中学生が指輪なんかをしている、ということ、

妙な興味を持たれるのは面倒なので、

上からバンソウコウをまいていたので、私は学校で

「バンソウコウ」と呼ばれているらしかった。

なぜバンソウコウを巻いているのか、

憶測を飛ばしている周りの人達の会話を

ラジオのように聞きながら、暇な人達だな、

と毎日本を読んで過ごした。〈中略〉

世の中は、二種類の馬鹿に分けられる。

気づいている馬鹿と、気づいていない馬鹿だ。

このうち、気づいていない馬鹿の方が

よっぽど可愛らしい。

堂々と、誰かをおとしめたい衝動に任せて、

素直に行動する馬鹿の方がよっぽど可愛げがある。

私が最も嫌悪するのは、愚かさに気づいていながら、

それをごまかして生きている人間だ。

私の中学には、Hという女がいた。

中学の頃、Hは一時、素直な馬鹿達の標的になった。

そして一人になる危機感を感じとったHは、

ある時から空虚なおどけをまき散らすようになった。

思ってもいないことに頷き、面白くないことに笑い、

いらぬサーヒス精神で相手を笑わせようとした。

そうして迎合することで居場所を作り、

傷を回避して、あは、あはと笑うHの目の奥は、

空白だった。

私は、その姿を見て、

どんなに自分が傷つこうとも、

こんな惨めな女にだけはなるまい、と思った。

それは精神的な死だ。

高校に入ってから、

虚構の話しふりがエスカレートしていったHは、

Sという親友の話をよく口にするようになった。

「Sという美人な親友がいて、

毎日彼女と歌を作っているんだ。」

「今度Sと作った歌でライブをするから、おいでよ。」

川沿いにある私が住んでいるマンションからは、

河原が見下ろせ、私の部屋からは、

毎日ギターを練習するHが見えた。

しかし私は、彼女の隣に、

誰かがいたところは見た事がなかった。

親友Sなど、存在しないのだ。

卒業してから数年して、ひょんなことで、

彼女が歌手をやっていることを知った。

本名で活動していたので、

すぐにそれがHだと分かった。

youtubeにあげている曲を一曲だけ聞いて、

作詞、作曲のところを見て驚いた。

そこには、彼女と連盟でSという名前があったのだ。

彼女はあの頃のまま、

誰かに向かって嘘をつき続けていた。

嘘の歌、それは、まさしく彼女の歌の印象だった。

虚構が香るHの歌を聴きながら、

歌に人生が宿るのだな、と思った。……」

そこまで読んで、私は吐き気がして、本屋を出た。

夏目キワコはパンソウコウか？

パンソウコウがさすHは私のことか？

いや、そんなはずはない、これは違う人のことだ、

河原で見ていたのは、私じゃなくて、私じゃない、

違うHだ、もしくは、

何かパンソウコウの記憶違いじゃないのか、

よくあることだ、昔の記憶が、

共有した相手同士で、違ってしまうことは、

記憶は曖昧なのだ、夢が記憶を処理して、非現実的な世界を、寝ている間に

あたかも体験したような気になってしまうのもそうだが、バンソウコウは、記憶力が悪い、のかな、仕方ない、しかし、まるでそれが

事実であるかのように書かれるのは困る、

それは名誉毀損じゃないのか。

これをSが見たらどう思うか、

Sの歌を、嘘の歌、嘘の歌とはよく言ったもんだ、

私は確かな手触りのもと、歌っていて、

歌は生まれて死ぬのであるから、

歌の生きている時間だけは真実でなければならず、

そこが嘘だというのであれば、何が本当になるのか、

ちょっとまで、しかしこれは小説だ、物語だ、

フィクションだ、私小説的に書かれてはいるが、

そもそも作り話じゃないか、バンソウコウも、

この小説の一人称の登場人物にしか過ぎない。

夏目キワコの想像上の人物なのだ。

そうだ、とにかく夏目キワコに会って、

その顔を一目見てやろう、

そして少しサービスをしすぎかもしれないけれど、

彼女の前で、一曲歌ってやろうかしら、

彼女は、あの小説？ あれは全部創作ですよ、創作、

と笑い、それよりもっとあなたの歌を

聞かせてください、と懇願するにちがいない、

なんていったって、私は今、

あの店で一番求められている歌手なのだから、

早速私は、夏目キワコに会うことを考えた。

出版社の男飯塚に、

夏目キワコさんのファンなのだけれども、

どうしても会いたいので、ぜひ、お会いする場を

一席設けてほしいニャンコロリン♪

と打診したところ、飯塚は、

快くセッティングしてくれた。

それから会うまでの5日間、

私は夏目キワコのことばかりが頭にめぐり、

ご飯も喉に通らず、風邪をひいたと言って、

お店を休んだ。

Sは、私の体調が悪そうなのを心配して

見舞いにこうかと言ってってくれたけど、

大丈夫、と言って断った。

やってきた夏目キワコとの会食当日、私は、

何かあったときの為にと、

果物ナイフを鞆に忍ばせた。

ナイフだなんて物騒な？

いや、これはお守りなのだ。



女はどんなときでも護身の為には

武器をもってちようどなのだ、目黒駅に降りた、

7時の待ち合わせに少し遅れて、

指定された店に入った。店内は広く、

奥にあるピアノの傍で、ここの専属の歌手だろうか、

誰かがシャンソンを歌っていた。

その近くのテーブルに座っている、飯塚が、

こちらに向かって手をあげる。隣には女性。

夏目キワコ。ヒールの裏に鼓動を感じながら

近づいていって、顔を見てホッとした。

夏目キワコは、あのバンソウコウではなかった。

夏目キワコは、華奢な、美しい女性だった。

『こちらが、僕の彼女の、凜子さんですよ、』と

飯塚は冗談めかして紹介し、

『夏目さんのファンの』と付け加えたので、

『そうなんです、ファンなんです、平松凜子です』

と言って夏目キワコに微笑んだ。

夏目は、『久しぶりですね、高校以来。』と言った。

心臓が飛び跳ねそうになりながら、

あれ、高校、同じ、ですかね？と、夏目に問うと、

『覚えてない？ 私、バンソウコウ。』と、

夏目キワコは言った。

飯塚は、同級生だったんだね、奇遇だね、まあ、

今日は、ゆっくり二人の昔話を聞かせてくださいよ、  
と言って、その夏目キワコは、

やはりバンソウコウだった夏目キワコは、

『私中高眼鏡かけてずーっと本読んでる

気持ち悪いやつだったから、みんな今会うと

誰？って言われちゃうんですよ、

あだ名がバンソウコウだからなあ』と、

あはは、と、飯塚にむかって瑞々しく笑った。

何か頼みましょうかと、

赤ワインをボトルで頼み、乾杯。

耳がじんじんして、

何の話しをしているのかよく分からなかったけど、

私はずっと笑顔らしかった、

筋肉がそう動いているのだけは分かった、

運ばれてくる魚介類を、口にいれながら、

何の味も感じない、くちやくちや飲み込んで、

バンソウコウはSの話には、一切触れることなく、

飯塚は冗談を言って笑い、

バンソウコウもそれに明るく笑い、

私もへへへと笑った。

すると、それまで聞こえていた

シャンソンの歌声が終わった。

夏目キワコは、『次が、洋子さんですね、』と言って、

飯塚は、『この次の洋子さんの歌、すごくいいんだよ、だから今日にしたんだ、凧子ちゃん歌手の卵だからいいかなあと思って。』と言った。

卵という言葉にひっかかったが、ありがとうございますー、と笑った。どうでも良かった。

ピアノの音が奏でられ、二人の言う洋子さんらしきその女性がマイクの前に立った。

60歳くらいだろうか、白髪混じりのその老年の歌手は、海のような深い青色のドレスを着て、

皺が刻まれた手でマイクを持ち、深い瞳でどこかを見つめ、

ピアノの音を背負って立っていた。その姿は、圧倒的に、そこにいる全ての人をひきつけた。静かに注目が高まる中、

彼女はゆっくりとまぶたを閉じ、一息吸って、歌い出した。

唄『こっちまっしたあいつに』

いっしまったあいつに

何を一言言おうかって

いっしまったあいつに

何を一言言えるかって

よくよく考えてみたけど

一言で言えることはみつからなくて

いま なにしてんだよ とか

この本 貸してやろうか とか

今までとおなじように

言うことしか 浮かばなかった

いっしまったあいつに

何を一言言おうかって

いっしまったあいつに

何を一言言えるかって

いっしまったあいつに どうしても

言えなかった さよなら さよなら

いつの間にか、私は目から、

ポロポロと湧き出るように涙を流していた。

その老年の歌手から放たれる空気が、

聞いているこちらの全身に響く声、

命を使って歌われる歌、全身で歌うその

一瞬一瞬に彼女の生涯がまつている声だった、

偉大な裸の声だった。

バンソウコウは、チラ、と私を見た。その目は、昔見た、じとっとしたバンソウコウの目だった。そして、その目には、

私への憐憫の色合いが滲んでいた。

鞆の中に手をいれ、鞆の中でナイフを握りしめ、パッとナイフを取り出し

スパッとバンソウコウの首をかつ切る、

という、想像をして、震える手で、

ナイフを持つ手を財布に変え、

一万円札を、テーブルに置いて、

すいません、と言って、立ち上がって、店を出た。

目黒駅から電車に乗って、

出勤の日ではなかったけど、お店に行った。

『凜子風邪大丈夫なの？』

というマネージャーの声を聞かずに、

足早に更衣室に行って衣装に着替え、

洗面台の前に立った。

鏡をみると、自分の肌が、

とても汚れているような気がして、

ファンデーションを塗りたくった。

白粉を塗っても塗っても、

その汚い肌はSの肌のように白くはならなくて、

白い肌を目立たせようと、

一番赤い口紅を塗ってみたけれど、

肌は全然汚くて、鞆からナイフを取り出して、

唇に刃先をあてて、唇から血が出て、

それを、口の周りに塗りたくったけど、

余計に汚い顔になった。

店のステージは、ショーの真ん中で、

ナイフを持ったまま客席を突っ切って、進んで行き、

他の女の子が踊る中に割ってステージに上がり、

ステージの真ん中に立った。

ザワザワとする店内の空気をよそに、

ただ、ステージの真ん中に、立った。

このステージが立つ場所かどうかわからないけど、

ここから、客席を見渡した。酔っぱらった客、

観客と呼べない客、この観客の中の、あいつと寝た、

あいつとも寝た、あいつとも寝た、あいつとも寝た。

私は、とつてもとつても汚れの落ちない、

ステージに立っていた。

私の持っているナイフを見て、何を勘違いしたのか、

マネージャーが慌てて飛んできて、

そういうことするんだったら、辞めてもらうよ、

とりあえず、今日は帰ってくれ、と言った。

マネージャーに、ふ、とナイフを近づけて

刺す真似をして、ステージを降り、家に帰った。

部屋の扉をあけて電気をつけると、

そこには真っ白なSが座っていました。

なんで家にいるの？との問いかけに、

「その顔はどうしたの？」

と、Sは尋ねて返して、そして、

全然肌に合っていないよ、そのファンデーション。

と言って笑いました。

「今日は、どこに行ってたの？」とSは尋ねて、

映画観に行ってた、と、私は答えました。

「どんな映画？」とSは尋ねて、

「なんで嘘つくの？」と、また尋ねました。

「なんでそんな汚いお店で働いてるの？」と、

Sに言ってなかったはずなのに、Sは知っていて、

「なんで、ちゃんとできないの」と言いました。

「なんでちゃんと生きれないの」

「いつまで私に頼るの」

「いつまでこの一人遊びを続けるの」

「もう、この一人芝居は終わりにしなさい」

と、私は、一人で言って、

そうだね、と、また、一人で言いました。

鏡の中には、一人、

いやに白い肌の、唇から血を流した醜い私が、

ナイフを持って立っているだけでした。

汚い私がつっつっているだけでした。

この汚い女を、

この世界から消してしまいたいと思って、

ナイフを首元に近づけた。

刃先が触れたその時、お腹が、ぎゅう、と鳴って、

身体は、馬鹿だなあとと思って、

私が、電源を切りたいと思って、

指令してるのは私なのに、

その命令をよそに身体は前に進もうとして、

身体と私はどっちがどっちなのか、

なんだか馬鹿らしくなって、滑稽すぎて、汚すぎて、

では、殺すほどでもないこの身体の持ち主の、

何かを、終わらせなくては、いけないと思って、

それから、深夜の、ライブハウスを貸して欲しいと

知り合いづてにお願いして、

そしてこうやって、今、誰もいない、

空っぽのステージで、

観客のいない中、ラストライブを、やっています。

お母さん、飽きれてるでしょうか。

お母さん。美しく、生きなさい、という、

あなたの教えがありました。

それを、いつからか踏み外してしまった私は、東京の片隅で、汚く、こんな、

ゴミのようになっしまいました。

私には、あなたにそっくりの、

Sという親友がいました。

彼女は、私をとて慕ってくれて、

私も、彼女を、とても慕っていて、

私が、もし、Sのようだったら、

あなたは生きてでしょうか、

私が、もし、Sのようだったら、

今からでも誇りに思ってくれるでしょうか。

あなたに、ずっと謝りたかったことがあります。

中学1年生の春、新学期が始まってすぐの頃、

あなたが、職場の学校で倒れた、

という話を聞いたとき、完璧なあなたが、そういう、

病気とか、死とか、そういうものと、

結びつくというのが、全く想像がつかなくて、

私は、あなたと、病室で対面すると、

それが最後になってしまいそうな気がして怖くて、

そのとき、病院へ行かなかった。

病院へ行かずに、アルバムからお兄ちゃんの、

写真を抜いて、それを握って走って、近所の、

教会になぜか走っていった、

私、キリスト教じゃないのに、

そこで、ずっとずっと祈ってました。

どの神様でもいいから、とにかく、

全ての神様にお母さんを助けてくださいと、

祈ってました。

でも、結局あなたは、その日のうちに、あっさりと、

この世界からいなくなってしまった。

あのとき、私があなただけにいたら、

あなたはもう少し長く生きてでしょうか。

あのとき、私がお母さん、と呼びかけてたら、

もっと安らかに向こうにいったでしょうか。

私があなただけにいたら、

あなたは生きてかもしなくて、

私はあなたを殺して、私は生きて、

あなたを思って、Sなんて人を作って、

……ああ、ばかだなあ、

本当に、ごめんなさい。

これが、最後のステージだけど、

今日は、初めて、あなたに歌ってみます。

唄「さこの歌」

あなたのいないこの世界

私には なんにもない

あなたがひいてくれたピアノの音

それに合わせて歌う

エーデルワイス（エーデルワイス）

台所の音聞きながら

宿題をした食卓

ピンクがきつと似合うよって

買ってくれたワンピース

アルハムの写真見て

これがお兄ちゃんだよって

教えてくれたあなたは

悲しい匂いがした

ペランタの後ろ姿

一緒に飲んだカルピス

私を叱ったあとで泣いたあなたの顔

入学式から増えない思い出

あの日から増えない記憶

あなたのいない世界

私にはなんにもない なんにもない

なんにもない Sなんていない

なんにもなかった

お母さん ごめんなさい

私があるのは、この身体だけ

あなたにもらったこの身体だけ

ちっほけて汚いこの身体だけ

この身体だけ

凜子は歌う、叫びのような歌、後悔の歌、

はじめてあなたに歌う、さよならの歌、はじまりの歌を。

おしまい。

藤原佳奈  
mizhen 主宰  
劇作家・演出家・俳優



1987年生まれ。

兵庫県姫路市出身。

京都大学文学部卒業。

学生時代、とある撮影現場で柄本明氏を目撃したことを機に、舞台に興味を持ち始める。俳優になるつもりで上京し、ENBUゼミナールに入学。クラスメイトに「自主公演を打ちたいから」と脚本・演出を頼まれる。三月ほど断り続けるも、しぶしぶ自分の中学時代を綴った処女作を書き、演出をする。それがきっかけとなり、卒業公演では劇作・演出を担当し、卒業後に同じクラスだった佐藤幸子、佐藤路子と演劇創作ユニットmizhen【みずへん】を旗揚げするまでに至る。名前の由来は、『演劇を観たことがない人にも、みずにはおれへん舞台を』の略。

人間の情けなさや滑稽さをシニカルに演出し、俳優の身体表現で舞台空間にカラフルな世界を立ち上げる作品を鋭意創作中。饒舌でリズムカルな長台詞を得意とする。

### 演劇歴

『ゆきちゃんと日曜日、世界は。』（2011 脚本・演出）

ENBUゼミナール卒業公演【24の瞳の次世代の最初の道筋】（ノゾ工征爾監修）にて、『舞舞舞舞舞舞舞舞！』（2011 脚本・演出）

『砂の女』（2012 原作：安部公房 脚色・演出）

mizhen『夜明けに、月の手触りを』（2013 脚本・演出）

『磯辺揚げとペヤング』で下北沢E-1グランプリ決勝進出（2013 脚本・演出・出演）

mizhen『Sの唄』（2014 脚本・演出）

mizhen『愛の漸近線』（2015 脚本・演出）

FFAC主催 “一つの戯曲からの創作をとおして語ろう vol.5”『葵上』（2015 演出）

東京ギロティン倶楽部『幸福論』（2015 脚本提供）

ブートレグ第2回公演『俺の地口を聞け！』（2016 脚本・演出）

ブラシュカ朗読劇『フナムシ』（2016 脚本・演出）

15MinutesMade15にmizhen『ともちゃんの、メモ』で参加。（脚本・演出）

### 受賞歴

2015年 福岡市文化芸術振興財団FFAC主催 舞台演出家コンペティション “一つの戯曲からの創作をとおして語ろう vol.5”にて観客賞受賞。

2015年 『夜明けに、月の手触りを』が、第21回劇作家協会新人戯曲賞の最終選考にノミネート。

2016年 第5回クォータースターコンテストで『マルイチ』（脚本・演出）が、グランプリ含め4賞受賞。

優秀賞

# 海の五線譜

吉田小夏



## 登場人物

杉田和彦 〈杉田家の父〉 68歳

和彦B 〈青年時代の和彦〉 20代〜30代後半位までの時代

杉田典子 〈和彦の妻〉 70歳〜青年時代

杉田美雪 〈和彦の長女〉 35歳／健介の姉 〈黒木家〉

高野春江 〈和彦の次女〉 30歳／健介の祖母 〈黒木家〉／声

高野徹 〈春江の夫〉 34歳 ↓ 和彦Bと同じ俳優が演じる。

黒木健介 〈和彦の大学時代の先輩〉／涼介 〈健介の甥〉

## あらすじ

杉田和彦と妻の典子は、長女の美雪と共に湘南の地で暮らしている。

ふたりは、同居する娘がいつまでも独身なことや、結婚して家を出た次女のことにも気を揉みながらも、夫が定年したあとの夫婦の人生を、穏やかに暮らしていた。

そんな日々の中で、妻の典子の物忘れが、急に目立つようになり。

和彦と美雪、それに週末にはたびたび実家を訪れる次女の春江も、典子の変化を、前向きに捉えようとする。年を取れば誰にでも起こりうることなのだ、と。だが、典子もまた自分自身と向き合おうとしたことで、彼女の心の奥にしまわれていたはずの秘密や風景が、鮮やかに現れてしまう。それは、ささやかな恋の思い出という形で、この一家に小波を起こした。母の小さな秘密に触れて、家族達は自分の心とも向き合うことになるのだが……

果たして、彼女が忘れてしまったものはなんだったのか。忘れられなかったことはなんだったのか。

典子と共に思い出を旅することとなった和彦が、見つけたものとは？

1970年代、新婚旅行の一大ブームに沸いた宮崎をモチーフに、太平洋で結ばれた遠いふたつの海と、空と、町とを舞台にし、夫婦や親子、そして、男と女の、心の交流の機微を描く。

※2010年代の和彦と、青年期の和彦Bは、年代の違う二人の俳優によって、二人一役で演じられる。

※高野徹は、和彦Bと同じ俳優が演じる。

※典子は、全ての年代を、30〜40代の女優がひとりで演じる。

※黒木健介、涼介、は同じひとりでの俳優が演じる。

※他、スラッシュになっている役柄や、新婚さんの観光客なども、6名の俳優が担当。

※★と☆のマークは、同時に発語される。

●場所：主に、鎌倉、宮崎。それらの海辺、一軒家の和室の居間、乗り物の中、街角、空港、等。他に、まるで登場人物の頭の中や心の中のような場所もあらわれる。

●時……1970年代。及び、2010年以降。

●空間……できるだけ様々な場所や時間に見える、自由な空間であることが望ましい。また、道具も素材でシンプルなもの望ましい。例えば、空に伸びてゆく飛行機雲は、俳優が掲げる紙飛行機でもよいし、車の中などの場面も、俳優が腰かける場所さえあればよい。できるだけ俳優の肉体が空間を生むことを想像してト書きが書かれている。

初秋の湘南。夕方の少し前。杉田家。少し古い造りの一軒家である。遠くに、穏やかな波の音。どこかの家で外すのを忘れられたままの風鈴が、風に煽られて鳴る音が、時折風にまじり聞こえてくる。開演10分前、杉田典子が登場。(演者の実年齢は3〜40代のはずなのだが、芝居により典子は老女に見える。)晝の居間を横切り、縁側に出て腰を掛け、箱から古い写真を取り出しては一枚つつ眺めている。とぎれとぎれに歌(『浜辺の歌』)をくちずさんでいる。

開演7分前、杉田和彦(68)、お盆に湯のみをふたつ載せて登場。縁側にいる典子に、そっとお茶を出してやる。

和彦 ……

典子 ありがとう。

和彦 うん。

典子 ……

和彦、典子、しばらく並んで座ってそこにいて、庭を見ながら黙ってお茶を飲んだりしている。典子はとぎれとぎれに歌い続けている。開演5分前、美雪(35)が、登場。

縁側までゆかず、廊下から呼ぶ。

美雪 お父さん。

和彦 ん？

美雪 ちょっと、いい？

和彦 何？

美雪 いいから、ちょっと。

和彦 はいはい。

和彦、美雪に促されて台所のある方に退場。

典子、再びひとりになる。典子はひとりになってもずっと、歌を歌っている。

1-1-1 夕風の少し前

開演。再び、杉田美雪が登場、縁側の典子を見つけ、そばまで歩みより。

美雪 お母さん？(優しく)

典子 ……(歌うのをやめて)

美雪 少し、風が出てきたね。ガラス戸しめようか？

典子 ……

美雪 寒くない？

典子 まあ、ご親切にありがとうございます。

美雪 お母さん？

典子 ……あのう、どちらさまでしたでしょうか？

美雪 ……

典子 ごめんなさい、お気遣いなく。

美雪 娘の、美雪ですよ。美雪よ？

典子 ああ、ありがとうございます。

美雪 ……これ、さげちゃうわね。(と、湯吞をとり、去ろうとして)

典子 あの。

美雪

え？

典子

これは、どこの海なのかしら？（と、手にした古い写真を見せ）

美雪

どれ？… どこだろう。この辺だったら、由比ヶ浜かしら？

典子

由比ヶ浜。そう。そうだったかしら。

美雪

本当に、海しか映ってないのね。

和彦、

奥から戻ってきて声をかけ。

和彦

おい。芋の皮、全部剥けたぞ。

美雪

あ、お父さんありがとう。

和彦

あんなに剥いて、どうすんだ。

美雪

だって、今日は春江も来るでしょう？

和彦

そうだけど。芋ばかりだとしてもしょうがないだろう？

美雪

いいじゃないの、お母さんだって大好きなんだから、お芋。

和彦

でも、

美雪

あら、春江だって、お芋好きよ？ 電話で何食べたい？って聞いたら「お姉ちゃんのポテトサラダ

和彦

が食べたい。」って、

美雪

わかったわかった。おい、典子。寒くないか？

和彦

今私が聞いたわよ。

和彦

え？ ああ。

典子

ちっとも寒くないわ。和彦さん、ありがとう。

和彦

ああ、うん。

美雪

…ごはん、もうすぐできるから。

典子

ありがとう。

美雪、

和彦、退場。典子、じっと写真を見ている。

と、

陽が傾きだし、空がどんどん赤くなる。遠く聞こえていた波の音、不思議とどんどん近づいてくるように聞こえる。

典子

あ、…。

典子

あ、夕陽を見つめてゆっくりと立ち上がる。夕陽に吸

い寄せられるように、裸足で庭においてゆき、立ち戻す。

波の音は典子を飲み込むように高く鳴り、典子は思わず目を閉じる。と、今腰かけていた縁側はあつというまに浜辺

の流木となり、庭先はどこまでも砂浜の続く浜辺なのである。小さく深呼吸する典子。明転。

### 1-2-1 春休みの浜辺①

1971年。鎌倉の浜辺。浜辺の遠くから、健介と和彦

Bの声がする。笑い声も。

健介(声)

典ちゃんーん！ のりちゃん！ おーい！！

和彦B(声)

おーい！！

健介(声)

ほら！ 帽子！ 捕まえたー！ おーい！

典子

(手を振って) おーい！ ふふふ。そんなに走っ

たら、転ぶわよー！

健介、和彦、典子の方に走ってくる。勢い余ってそのまま、典子の足元に転がるふたり。砂の上に腰をついた和彦Bと健介、笑っている。

典子 ええ？ 何？ 何よ？

健介 (息を切らしたまま) いやあ、走ったなあ。はい、と、手にした麦わら帽子の砂を払って典子に渡してやる。

典子 ありがとう。

健介 もう飛ばされちゃだめだぞ？

和彦B 良かったですね、波に持ってかれなくて。

典子 ふふ。もしまた飛ばされたら、健介さん捕まえてね？

健介 コラ。僕は何回海に飛び込めばいいんだ！（ふざけて）

典子 ふふふ。

和彦B 典子さん。僕と黒木先輩と、どっちが先にゴールしましたか？

典子 え？ なあに、どこがゴール？

健介 ゴールは、典ちゃんだよ。典ちゃんが、ゴール。

典子 え？ わたし？！ わからないわよ、そんな。

和彦B 決めてください、審判！

典子 ええ？ じゃあ、うーん。健介さん。

健介 ☆よしっ！！！

和彦B ★うえー、俺の負け？

典子 だから、わからないわよう、私。

和彦B ずるいな、典子さんは黒木先輩にお熱なんだから。

典子 まあやだ！ どういう意味？！

和彦B いやあ、今のは勝ったと思ったんだけどなあ。

典子 からかわないで。

健介 よし、行け！

典子 え？

健介 典ちゃんも、走れ！ あそこに落ちてるワカメを目指せ！

典子 いいわよ私は。足遅いんだもの…。

和彦B そう、典子さん足遅いですよね？！ 僕、ずっと思っていました。グリークラブの基礎練の時とか、

走るといつもこう、ひとりだけどんどんどんどん、後ろになって。ふふふつ。

典子 いいでしょ、別に。歌いたくて合唱団入ったんだもの、走るためじゃないもの。

和彦B 典子さんは、学部で一番、足が遅かった〜♪

ルルル。(流行歌の節で歌う)

典子 もうっ、杉田君！？

和彦B はははっ！（逃げる）

健介 よし！ 杉田。負けたんだから、飲み物買って来

い！

和彦B ええ？ ガビン！

健介 行け！

和彦B はーい。

健介 俺、スプライト！

典子 あ、じゃあ、私もスプライト！

和彦B オーライ…。

1-2-2 春休みの浜辺②

和彦B 足早に退場する。残された、典子、健介、少し笑う。並んで波をみている。

典子 …♪（ぼつぼつと歌を歌う）

健介 …。

健介、典子とさりげなく手をつなごうとする。典子、笑いながら払う。

典子 もう、…ちょっと！（和彦の去った方を気にして）

健介 大丈夫だよ。

典子 ダメ。

健介 どうせ感じてるよ、杉田だって。

典子 ダメ！

健介 ちえっ。

典子（笑って）ああ、ずっと、春休みだったらしいのにな。

健介 今朝、小林から絵葉書が来てたよ。エアメール。

今、ギリシヤにいるらしい。

典子 ギリシヤ！ エーゲ海かぁ。コバさん「最後の春

休みは、絶対ヨーロッパをまわる！」ってずっと言ってたもんね？

健介 ヨーロッパだったって、バックパッカーだろ？ ナウじゃないよ。

典子 いいじゃない。私もいっぺんいいから、船や飛行機に乗ってみたいわ。うんと遠くに行ってみたい。もっともっと、色んな海、見てみたい。お勤めが始まったら少しづつお金を貯めて、それで、

健介 …。

典子 どうしたの？

健介 僕もね、ちょっと遠くに行ってくる。

典子 え。

健介 や。しばらくね、実家に行くことになって。

典子 そうなの？ いつ？

健介 明後日から。

典子 え。

健介 春休み、会えなくなってしまって申し訳ないんだけど。

典子 ううん…。でもどうして急に。

健介 ごめん。なかなか言い出せなくて。（頭を下げて）

典子 いいの、気にしないで。

短い間

健介 典ちゃん、あのさ。

典子 ん？

健介 一緒に来ないか？

典子 ……

健介 前に、見てみたいって言ってたろう？ 僕の生まれたとこ。

典子 それは、言ったけど…。

健介 卒業旅行とは、ちよっと違うかもしれないけど。

典子 ……

健介 駄目だよな、そりゃ。当然だ。(焦って明るく)

典子 ……ごめんなさい。

健介 や、僕こそごめん。変なこと言って。

典子 私、…そういうことは、新婚旅行までとっておき

健介 たくて。

典子 そうだよ、そりゃそうだ。うん。あ！ 違うんだよ？ あのね、そういうつもりで言ったんじゃないんだよ？ 何かそういう、あの、あ、

典子 ……。(目がみるみる潤みだし)

健介 典ちゃん？

典子 私のこと、ネンネだと思ってる？

健介 そんなことない。そんなことないさ。

典子 ごめんなさい。なんでだか急に、お母さんの顔、

健介 思い出しちゃって。おかしいわね。

典子 ……。(そっと手を繋ぐ)

典子 ……。(素直に繋がれるが、少しそわそわして)

健介 大丈夫、しばらく戻って来ないよ。あっちの売店、

典子 スプライトは無い。

健介 え？

典子 コーラとバヤリースしかなかった。さっき、見た。

健介 まあ。じゃ…、

典子 ごめん。

健介 手を繋いだままのふたり。

典子 向こうに着いたら、きっと手紙を書くよ。

典子 と、潮風が強く吹き、バヤリースの瓶を3本持った和彦

和彦 (68) が現れる。

典子 期待させ。

典子 え…?!

典子 海の風が舞って、典子の帽子、再び飛ばされてゆく。

典子 あ…。

健介、とっさに飛んだ帽子追いかける。明転。

11213 いくつかの記念写真

風と共に、思い出がどっと溢れ、典子の周りを吹きすさぶように行き交う。

思い出に現れる人々も、帽子もジュースも写真も、旋風

のように舞って…海風の渦の中で撮られる、典子の記憶の

中の、記念撮影。

美雪 お母さーん！

春江 お母さーん、ここ、ここ！

典子 お母さん？

美雪 お母さん！ 写真、ここで撮りましょう。海が凄

く綺麗に入る。お父さんも、早く。もう、なんで  
今ジュースなんて買ったの？

和彦・和彦B や、お前たち、飲むかしらと思って…。

美雪 あら？ ピントがなんだか。何これどうなってる  
の？

春江 お姉ちゃん、私ジャケット押そうか？

美雪 いい、いい。あ、じゃ、春江はジュースを持って  
なさい。

春江 はいはい。お父さん、それこっち。

典子 美雪と、春江と、

美雪 はい、笑ってー！

和彦 おい、せっかく写真撮るんだからお前達が入りな  
さい、お父さんが撮るから。

典子 和彦さんと、

美雪 ちよっともう、何言ってるのよ！

春江 お父さん、照れないでー！ お母さん、笑ってー！

典子 笑ってますよ。

和彦 典子、笑って。

美雪 お父さん口動かしちゃだめ！

和彦 あ、うん。

美雪 黙ってて！ じっとして！ 笑って！ そう！

撮るわよー！

シャッターが切られ、風景が止まる。波の音。と、写真  
の中の、若き日の典子、和彦B、健介、風と共に走り去る。

明転。

### 1-3-1 土曜日の食事の後

食卓(座卓)が出されている。和彦、美雪、春江、が居  
る。

春江 …え？ じゃ、お姉ちゃんのこと、わからなかつ

たの？

美雪 一瞬よ？ 一瞬ね。

春江 そう。

美雪 まあでも、波があるものみたいだから。

春江 うん…。

美雪 春江も、あんまり、ぎょっとしたりしないで、で  
きるだけお母さんに話をあわせてあげて欲しいん  
だけ。

春江 うん、わかった。

美雪 とにかく、怒ったり、否定しないであげて。笑顔  
ね。まわりが笑顔でいるのが、なにしろ大切なん  
ですって。テレビでやってた。

春江 わかった！

美雪 お父さん、そんな顔しないで。ほら、笑顔！

和彦



和彦 あ、ああ、うん。

春江 お父さんのことは、まだ一度も間違えてないんだね？

和彦 うん。それは、もちろん。もちろん、それは。

美雪 ……

和彦 ん？

春江 (姉を気にして) あ！ でも私、前に何かで聞いたことある。なぜだか、大事な人から忘れていくんですって。一番大切な人のことから、忘れていくって。

和彦 え。

春江 あ。や、だから、そういう話もある、っていうだけで、

典子、お茶の入った湯呑と急須の乗ったお盆を持って戻ってくる。

典子 ……お待たせしました。

和彦 おお、ありがとうございます。

春江 このお茶、美味しいわよね。たくさん飲んじゃう。

ふふ。(笑顔で)

典子 ごめんなさい、晩ご飯が、少ししょっぱかったかしら？

春江 そんなことないよ。

美雪 お母さん、今日は夜作ったの、私よ？ うふふ。

典子 え。あら。そうだった？ そう…。

美雪 でも、お母さん、朝ごはん作ってくれたよね？ ……

和彦 春江は、あれだろう？ 今日泊まっていけるんだろう？

春江 うん、もちろん。

和彦 あれホラ、波乗り。なあ？ するんだもん？

春江 サーフィンね。

典子 サーフィン？

美雪 ほら、こーんな大きいボードが、納戸に入ってるでしょ？

典子 ああ、あの、やたら大きい。

春江 ごめんね、置かせてもらっちゃって。

美雪 ほら、明日は日曜日だから。

典子 日曜日。そうか、日曜日よね。

美雪 そう。春江はね、サーフィンの為にここに来てるのよ？

典子 そうか。そうだったわね。

春江 ごめんなさい…。

和彦 おい、謝ることじゃないだろ、別に。

典子 お休みの日なんだったら、徹さんも連れて来たら良かったのに。

春江 え。

和彦 ああ、そうだよなあ。ねえ、じゃあ来週はぜひ一緒に。

典子 ねえ？ もう家族なんですから、遠慮しないでって伝えてね？

春江 うん。

典子 お父さんだって徹さんが来てくれたら、ビールの相手が出来て嬉しいし、ねえ？ うちねえ、誰もお酒が飲めないから。

和彦 ははは、そうだなあ。

典子 春江が飲める人と一緒になってくれて、本当に良かった。娘の旦那さんと晩酌するのが、お父さん、夢だったものね。

和彦 ははは。

美雪 お母さん、お蜜柑持ってきてもらってもいい？

典子 お蜜柑？

美雪 昨日、届いてたでしょ？

和彦 ああ、そうだなあ。ほら、黒木先輩のときの。

典子 ああ！ そうねえ。いただきましょか。

典子、玄関の方向に退場。

美雪 ちょっと、お父さん！ お母さんにあわせすぎよ。

和彦 ええ？ だって、お前さっき、お母さんにできる

だけ話をあわせて、っていったらう？

美雪 少しは春江のことも考えてよ。

典子、ひよっこり戻る。

典子 あのう。

美雪 何？

典子 黒木さんのところに、蜜柑のお礼の手紙は、もう出したかしら？

美雪 まだだけど。私が出しておきますから。大丈夫よ？

典子 そう…。

典子、退場。

和彦 どうすんだ。

美雪 え？

和彦 じゃ、ハッキリ言った方が良かったのか？ 春江と徹君は別居中です、って。

美雪 それは…。

春江 ちょっと、お2階行ってくる。

和彦 え？

春江 ベランダで、煙草、一本吸ってくるね。

和彦 ああ…。

美雪 気をつけてね…。

春江 …。(何に気をつけるのかよくわからずに笑う)

春江、退場。和彦、典子が広げていた写真などを気にして。

美雪

大体、サーフィンの話だって余計よ。

和彦 何？

美雪 春江が急にサーフィン始めたの、別居してからよ？  
和彦 ん？

美雪 じゃないわよ、別居したせいでサーフィンを始めたのよ？ わかる？

和彦 春江がそう言ったのか？

美雪 じゃないけどさ。

和彦 ならそんな、わかるもわからないも。

美雪 わかるじゃん、そのくらい。きっとさ、何かをふつきりたいのよ、ざっぱーんて。それで波乗りなのよ。絶対そう。

和彦 別に、何か他の理由かもしれないだろう？

美雪 何よ。

和彦 なんだ。ほら、ダイエットとか？ やってるだろう、みんな。ダイエット。お前はしないかもしれないけどさ、みんなやってるんだよ、今の若い女の人は、みんな。それくらいはね、お父さんだっ

美雪 ……

和彦 とにかく、夫婦のことは、よそから見たってあれなんだから。

美雪 何よ、あれって。

和彦 だから、あれだよ、あれ。

美雪 あれとかそれとか、言わないで。

和彦 だから、ほら、ええと。「夫婦のことは本当のところは二人にしかわからない」って、よく言うだろう？ 春江と徹君だって、そうだよ。

美雪 まあ、私は夫婦になったこと、ありませんからね。

和彦 そんなことは言っていないだろう。そんなに膨れるなよ。

美雪 膨れてないわよ。

和彦 膨れなさんなって。笑顔が大事って、さっき自分で言ってたじゃないか。

美雪 私、ちよっと、お皿洗ってくる。

と、美雪、立ち上がり、廊下に去ろうとして。

和彦 ……なあ、ちよっと。

美雪 何？

和彦 さっきのあれは、本当なのかな。

美雪 え？

和彦 その。なぜだか、大事な人から忘れていくって言う話。一番大切な人のことから、忘れてゆくなって。

美雪 ……

典子、蜜柑を手にとって戻って。

典子 ね、美雪は2つ食べるわよね？ ……っ？

美雪、退場。

和彦 おい…！

典子 どうかしたの？

和彦 や。

典子 あ。お蜜柑のお礼の手紙、お出ししたかしら？

ほらあの、ええと。…やあね。(名前が出てこないことに笑って)

和彦 ちょっと、歩いてくる。

典子 こんな時間に？

和彦 ちょっと、海まで。

典子 …。(和彦をじっと見つめている)

和彦 なんだ？

典子 ううん。いってらっしゃい。

和彦 うん。

典子 …。

和彦、退場。典子、ひとり部屋に残る。典子、ひとりづつの為に蜜柑を並べる。明転。

## 2-1-1 南からの手紙

1972年の、健介から典子への手紙。そして、その後のいくつかのやりとり。

ふたりは、まるで空と海と越えて対話しているようにも見える。

健介 典ちゃんへ。お元気ですか？ そちらは、お変わりありませんか？ こちらは、今日も晴れです。

青空です。青くて高い、夏の終わりの空です。典ちゃんに、お元気ですか？と書くのは何度目だろ

## 典子

う。と、ふと思い、数えてみようかしらと思ったけれど、不粹に思ってやめました。不思議だね。あの春休みの手紙が、こんな風に続くことになるなんて、あの頃は思っていませんでした。嬉しいし、少し悲しいです。悲しい、というのは、手紙では典ちゃんの笑顔が見られないからです。一緒に炭酸水を飲むことも、歌うことも、砂浜を歩くことも、できないからです。あたりまえだね。せめて面白いことでも書いて、君に笑ってもらえたらいいのだけれど。典ちゃん、あの春休みの最初の手紙ね、本当はね、僕にとって、小学校以来の、女の子への手紙でした。だから書くの、すごく緊張したんだ。いい年して、おかしいでしょう。お元気ですか？が、何度目だろうと思ったら、そのこと急に思い出しました。そちらは、もう涼しいですか？

空は、晴れていますか？ 仕事には、慣れてきましたか？ 僕は、やっと少し慣れてきた気がします。親父の足の具合は、その後、一進一退といったところ。また、お手紙を書きますね。九月十日。黒木健介。

健介さんへ。お返事が遅くなってしまってごめんなさい。お手紙、いつも楽しく拝見しています。

## 健介

健介さんからのお便りが来ると、朝と晩と、思わず空を見上げます。おひさまを見よう、上を向いて歩こう、という気持ちになります。ありがとう。仕事には慣れてきたのか、自分でもよくわかりません。花嫁修業なんかより、お勤めするのが夢だったけど、本当に自分にあっていたのかな、とふと思うときがあります。自分で決めたことなのに、情けないや。こんなことでは、いけませんね。よし、上を向こう。こちらは、もうすぐ上野にやってくるパンダの話題で持ち切り。もちろん、私も見に行くつもり。あなたに笑顔を思い出してもらえるように、写真を一枚同封します。夏の社員旅行で伊豆に行った時のもの。最後になってしまいました。お父様の足のこと、どうかお大事に。典子。P.S. 来週のグリーククラブのOB会にはいらっしやいますか？ 私も、健介さんの笑顔が見たいです。

典ちゃんへ。お元気ですか？ こちらは、今日も晴れです。青空です。飛行機雲が一筋入った、綺麗に澄んだ秋の空です。写真、本当にありがとう。驚いてしまった。口紅を引いた典ちゃんが、こんなに綺麗だったなんて。お返しに何か同封したかったのですが、こちらに戻ってから、自分の写真が

一枚も無いということに気が付きました。親父のコンパクトカメラを、押し入れからひっぱりだしてみます。それでは、また。九月二十日。健介。P.S. OB会、残念ながら欠席です。遠さを歯がゆく思います。皆さんに、どうかよろしく。典子、黙って空を見上げる。そして雲を見つめる。

典子  
：あ。

秋空を飛んでゆく飛行機と、長く長く伸びてゆく飛行機雲。(飛行機雲は、俳優が手で掲げる白い紙飛行機で表現される。ゆっくり歩く晴江から美雪へ、そしてまた春江へと手渡されながら宙を進むひとつの紙飛行機) 和彦登場、典子をOB会の会場の中に誘う。

和彦 B 典子さん？ あっちで集合写真撮りましようって。

コバさんが自慢のライカ持ってきた。

典子 ね、杉田君、見て。

和彦 B え？

典子 ほら、あそこ。飛行機雲。どんどん伸びてく。

和彦 B ああ、ほんとだ。綺麗ですね。

典子 あれは、どの町に行く飛行機なのかしら？

和彦 B (笑って)

典子 何？

や、変わってないなあと思って。典子さん、いつか飛行機に乗りたいって、よく言っていましたもん

ね。

典子

え。

和彦との会話の思い出、ふっと秋空に滲んで、一瞬で消える。伸び続ける飛行機雲。

健介

お元気ですか？

典子

…。(典子、遠くにいる健介を見る。)

健介

こちらは、珍しく曇り空。小雨がさらさら降っています。OB会はどうでしたか？ 大きな声で笑う皆の顔が目には浮かぶようです。

今年、最初の蜜柑をお送りします。僕が作った蜜柑です。やっと、僕が作ったと言えるようになりました。少しですが、召し上がってください。同封した写真は、ひとりで海に行った時に撮ったものです。笑顔の写真、送れなくてごめんなさい。なんだかどうしてもうまく撮れなくて。代わりに、僕の生まれたとこの、海の写真をお送りします。十月三日。黒木健介。

健介、典子、遠く遠く太平洋を挟んで、見つめ合っている。お互いを呼ぶ声は、少しづつ強くなり。

典子

お元気ですか？

健介

お元気ですか？

典子

お元気ですかー！

健介

こちらは、今日も晴れです。青空です！（健介は

懸命に手を振る）

典子

健介さん、海の写真、いつもありがとう。今日は、お話ししなければならなかったことがあって、お手紙書きました。でも、お元気ですかと書いてみて、それだけなのに、もうこの手紙を出す勇気がありません。

和彦登場。典子、健介から目を離す。

和彦B

典子さん？ あっちで、集合写真撮りましょうって。コバさんが自慢のニコン持ってきた。

典子

あ。

和彦B

ほら、花嫁がいなかったら絵になんないじゃない、早く。

典子

はい、今。

和彦B

髪、大丈夫かな？

典子

髪？

和彦B

胸上げされちゃった、へへへ。会社の同期、体育会系のやつが多くて。

典子

大丈夫、素敵よ。(和彦Bの髪を少し触ったりして)

和彦B

やっぱり三次会もやろうって。急いで店とってくれた。

典子

あ…。

和彦B

行くでしょう？

典子 ええ。でも、ずっと、バタバタしてたでしよう？

せて今夜は、二人で少し、ゆっくりおしゃべりしたり、

和彦B あ。典子さん、見て。

典子 え？

典子と和彦B空を見上げる。健介も、遠く九州で空を見上げる。現代の和彦も鎌倉で空を見上げている。

和彦B ほら、あそこ。飛行機雲。どんどん伸びてく。

典子 わぁ、ほんとだ。綺麗…。

和彦B 明日は僕たち、あっちの空の中にいるんだね。

典子 ええ。

和彦B やつと典子さんを、典子を、飛行機に乗せてあげられる。

典子 ありがとう。でも、残業ばかりさせちゃって。

和彦B いいんだよ、そんなことは。一生に一度の旅行だもの。バーンといかなきゃ。ケチケチしてられな

いよ。大切に、過ごそうね。

典子 ええ…。

空高く、飛行機が過ぎてゆく。見上げている二人。舞台上には、他の全ての人物も居て、空をゆく飛行機を見ている。飛行機雲は、どんどん伸びてゆく。(紙飛行機を掲げる晴江の歩行は、ふっと加速し、紙飛行機は次々走り出す俳優の手に順に渡り…)そして、人と人とを結んでゆくよ

うに、一気に飛び去ってゆく。明転。

## 2-2-1 ある日曜日の午後①

休日の午後の居間。和彦と徹が差し向かいで黙って座っている。

徹 …。

和彦 …。

徹 あの。

和彦 え。

徹 すみません。(頭を下げる)

和彦 いやいや、そんな謝らないで。

徹 本当に、すみません。

和彦 いや、こちらこそ、お待たせしてすみません。春江も、そろそろ帰ってくるはずなんだけど。

徹 はあ。

和彦 遅いねえ…。

徹 …。

和彦 お茶でも淹れようか。

徹 いえ、結構です。

和彦 え？

徹 お茶を飲む資格も、ありませんので。

和彦 徹君、そんな。

徹 本当に、申し訳ない…。

和彦 いや、僕はね、別に徹君だけが悪いなんて思って

ないんだよ？ こうやって、ちゃんと話そうって、わざわざ来てくれたんだし。

徹 お義父さん、すみません。本当にごめんなさい。  
和彦 や、僕に謝らなくてもいいから。

徹 でも、大切な娘さんをいただいておいて、こんな。  
和彦 まあまあ、まだ、別れたわけじゃないんだから。

徹 ……  
和彦 や、あ。「まだ」っていうのは、あれだよ？ その…。

徹 羨ましいです。（お義父さんが、という感じがあ  
る）  
和彦 え。な、なんだい、急に。

徹 お義父さんとお義母さん。いつお会いしても、お  
二人とも、いつもにこにこして。本当に仲が  
よろしくって。

和彦 そ、そうかな。  
徹 どうして、自分は…。

和彦 や。別にうちだって、そんな立派なものじゃない  
よ。（励まして）

徹、和彦、たよりなく笑いあう。

和彦 あの…。  
徹 はい。

和彦 春江のやつ、うちの典子のこと何か言ってなかつ

徹 たか？  
…や、特に何も。

和彦 そう。  
徹 お義母さんのことも何も。電話でも、殆ど口を聞  
いてくれなくて。

和彦 ちよっと…。（声を潜めて手招きし）  
徹 ……？

和彦 最近、物忘れが多くはなってたんだけど。こない  
だ、うちの美雪のことが一瞬わからなくなってし  
まって。

徹 え?!  
和彦 うん…。

典子 典子が蜜柑をいくつか持ってきて。  
どうぞ…。

徹 ああ…、お義母さん、すみません。わざわざ。  
典子 まあまあ、そんなに固くならず。足を崩して？

徹 あ。  
典子 ごめんなさいね、お待たせしちゃって。

徹 や、こうやって、待たせていただけだけでも、…  
はい。

典子 でも、本当にお久しぶりね。いつぶりかしら？  
徹 すみません。

典子 春江にも、言ってたんですよ？ 次は徹君と一緒



に來なさいって。

ああ、はあ。

はははははっ。

徹君、暫く見ないうちにますます和彦さんに似てきたわねえ。

はあ。そうでしょうか？

そうよ、このへんなんて、お父さんの若い頃にそっくり。ねえ？

おい、そんなこと言ったら、徹君に失礼だろう。

徹君はもっと二枚目だよ。なあ？

いえ、光栄です。はい。

よく憶えてる。春江が初めて徹君をこの家に連れてきた時ね、私本当にびっくりしたんだもの。ああ、春江はお父さんに似た人を選んだんだなあって。それでとっても安心したの。こういう人となら、きつと幸せになれるだろうって。

。。。(突然鼻を吸り、目頭を押さえてしまう)

え？

すみません。。。(再び鼻を吸り)

よし、お茶があればなら、珈琲でも淹れよう。(和彦、立ち上がり。)

あら、お父さんいいんですよ、私が。

和彦 いいから、いいから。

和彦、退場。典子、徹、二人になる。徹、もうひとつ、

鼻を吸る。

典子 。。大丈夫？

徹 春江に言われたんです。どうしてあなたみたいな人を選んだのか、わからない、って。

典子 え。

徹 電話で。

典子 あら、まあ。。。。そんな。

徹 すみません、お義母さんにまで、こんな話。

典子 。。。(ぼんやりしてしまう)

徹 お義母さん？

典子 あ、ごめんなさい。

徹 いえ。。。。どうかなさいましたか？

典子 私。。。。

徹 。。。。はい。

典子 私は、どうしてお父さんと結婚したのかしら。

徹 え。。。。

典子 どうして、和彦さんと一緒になったのかしら？

徹 。。。。

典子 なんだかこの頃、うまく、思い出せなくて。

徹 そんな。お義母さんまでそんなこと、仰らないで

典子 ください。

何度か、思い出そうとしたんだけど、なんだかふっ

と、違うこと、思い出してしまっ

と、違ふこと、思い出してしまつて。

典子、徹の顔をじつと見ている。そこに若き日の和彦の姿を重ね、ふと何かを思い出し。

典子 ……あ。(一)

徹 え…？

典子 和彦さんが、初めて私の両親に挨拶をしてくれたとき…。

徹 え…?! ええ。

典子 あの人は、一張羅のベージュのスーツに、鮮やかなコバルトブルーのネクタイをしていたの。

徹 うん、うん。

典子 そう、それで…私の母が、「そんなに固くならずに。足を崩して？」って、和彦さんに言ってくれて。

徹 ああ、いい話じゃないですか。

典子 私は、じーっと、コバルトブルーのネクタイを見てた。この人、どうしてこんな派手な色のネクタイをしてきちゃったのかしら? って、なんだか、がっかりしちゃって。

徹 え…。

典子 そう、そうよ。ああ、そうだった…。(苦々しく)

徹 でも、でも、お義母さんは、そのお義父さんと、

結婚したんですよね? コバルトブルーのネクタイと、一生をともしようって、決めたんですよね?

典子 あの人、どうして…。あのコバルトブルー…。

徹 (更に苦く)

典子 じゃ、なら、コバルトブルーはともかくとして、それでも、今日までずっと別れずに、一緒に暮らしてきたわけですよ? お義父さんと。そうでしょう?

典子 ええ…。

徹 なら、「どうしてこの人と一緒になったんだろう」なんて、そんな寂しいこと言わなください。だって、そんな大切なこと…、

典子 でも、私、

徹 どうして忘れなきゃいけないんですか? 忘れな

典子 いであげてください。お願いですから。

徹 ……。

典子 あ…。

徹 ……。

典子 すみません、…本当に、失礼なことを言ってしまった。

徹 て。ごめんなさい。

和彦、戻る。

和彦 おい珈琲の買い置きなかったっけ? やっぱりお

茶でもいいかな？

あの。僕、今日は、これで。

徹

え？

徹

すみません。あの…、また、出直します。

和彦

ああ、うん。じゃ、また。あんまり、気を落とさずに。うん。

徹

春江に、よろしくお伝えください。…いえ、もうここで。すみません。失礼します。

徹、退場。

和彦

大丈夫かな、徹君は？ すみません、すみませんって、サンペイじゃないんだからなあ？ ははっ。

典子

…。(ぼんやりしてしまっ)

和彦

典子？ どうした？

和彦

私、健介さんにお手紙を書かなくちゃ。え？ 手紙？

典子

大変、…忘れちゃうところだった。

和彦

健介さんて、…黒木先輩のことか？

和彦

お手紙の、続きを…。(咳く)

和彦

でも、だってお前それは…。

和彦、典子を止める。

おい…！

典子さん？ 落ち着いて、ね？ …ええと。そう

だ。お、お手紙もいいけど。お手紙を書く前に、

一緒に、み、蜜柑でも食べようか？

典子

お蜜柑？

和彦

典子、さっき、蜜柑とってきてくれただろう？

典子

え？ 私が？

和彦

うん。

典子

そうだったかしら…？

和彦

そうだよ、そうだよ、さ…。

和彦

和彦、典子を連れて部屋の中に戻り座らせて、典子の前

に蜜柑を置くと、

自分も蜜柑を食べようと剥きます。自分

を落ち着けようとふんふんと鼻歌(「かなりや」)などを歌

いながら剥いている。典子それにつられて、いつものよう

に蜜柑を剥きだす。

典子

かなりや…？

和彦

おお、うん。

典子

その歌、なんだか懐かしい。

和彦

うん。ほら、グリークラブの飲み会で、コバさん

がよくふざけて、

ファルセットで歌ってくれたらう。

う。♪あゝあゝあ、あゝって。

典子

うふふふふっ。

和彦

典子、剥きながらふと手をとめている。和彦、ひとふさ、

自分の口にはおりこみ。

和彦

うん、美味しい。

典子 ……

和彦 食べないの？ なかなか、甘いよ。

典子 (ゆっくりと和彦を見て) 杉田君？

和彦 え？ なんだよ、急に。恥ずかしいからやめなさいよ。

典子 杉田君。

和彦 ええと、う、うん、…典子さん？

典子 杉田君。(明るく)

和彦 典子さん！(明るく)

典子 新婚旅行、私を飛行機に乗せてくれて、ありがとう。

和彦 え。

典子 また、乗れたらいいね。

和彦 うん、そうだね。

典子 杉田君と二人の旅行は、結局、あれっきりだったわね。

和彦 そうだね…。

典子 うんと速くに行ってみたい。もっともっと、色んな海、見てみたい。

和彦 ごめん。本当に、すまなかった。結婚してからずっと、仕事ばかりで、あれっきり、旅にも連れて行ってやれなくて。

典子 ……。(蜜柑を食べている)

和彦 お茶、淹れようか。

典子 ありがとう。

和彦 ……

和彦、急いで台所にゆく。典子、座って蜜柑を手に、ぽつぽつと歌を歌っている。明転。

21212 南への手紙

美雪 黒木様。蜜柑のお礼状のお返事、ありがとうございます。

お礼状のお礼状にまたもやお返事を書くのは、本当はマナー違反なのかもしれないですが、お言葉に甘えてお返事を書きました。果樹園のお話、とても面白かったです。特に、梅の木が寿命を終えるその年に、恐ろしく沢山の実をつけるというお話。枝一杯に青い鈴なりの実をつけた大きな梅の老木の姿を想像すると、怖いような美しいような、不思議な気持ちになりました。土に還る最後の瞬間まで、命は燃えているのですね。私も植物が好きで、庭の草むしりなどは熱心にやるほうなのですが、…ごめんなさい。また長くなってしまいうので、今日はこの辺で筆をおこうと思います。それでは、また。杉田美雪。追伸・字が綺麗と人から言ってもらったのは、高校生以来です。なんだか微笑んでしまいました。ありがとうございます。

明転。鎌倉の街角。海のそば。春江、駆け寄るように現れ、美雪に瓶入りのジュースを渡す。

美雪　ありがとう。

二人、飲みながら浜辺を散歩して。

春江　なあに？　嬉しそうね。

美雪　え？　そう？

春江　誰にお手紙書いたの？

美雪　え？

春江　だって、郵便局に寄ってから、ズーっとにここに

してるから。

美雪　そんなことないわよ。

春江　何？　ついに、彼氏できました？　ラブレター？

美雪　やだ、そんなんじゃないわよ、全然。

春江　いいじゃん、隠さないでよう。

美雪　そんなんじゃないって。お蜜柑くださる方にね、

お礼状。

春江　ふうん。

美雪　手紙だったって、お母さんのお手伝いだもの。

春江　…ごめんね。

美雪　え？

春江　家のこと。お姉ちゃんにばかり、色々まかせちゃっ

て。

美雪　何よ、急に。

春江　だって。お母さんのこととか、やっぱりさ…。

美雪　お母さんのことは、私が必要とかするから、大丈夫！　全然、大丈夫よ？！　私、これでも最近、

色々勉強してるんだから。

美雪　でも…。

春江　あんたは、まずは自分の家のことちゃんと考えな

さい。

美雪　あはは。

春江　あははじゃないでしょ、まったく。

美雪　ああ、しょっぱい風はいいな。

春江　…。

美雪　落ち着くな。懐かしい海の匂いにする。

美雪　そうね…。

春江　「おかえり」って、言われてるような気がする。

美雪　…。

春江　ねえ？　お姉ちゃん、私が結婚して家を出る時、

めちゃくちゃ泣いてくれたよね？　春江に毎日

「おかえり」って言えなくなる、って言って。

美雪　やめてよ、ちょっともう。

春江　なんだか最近、あの時のことよく思い出しちゃっ

て。お姉ちゃんがぐずぐず泣いてたら、なんだか

お母さん迄ポロポロもらい泣きだしちゃって、

そしたらお父さんが、よし、皆で写真を撮ろう！って言い出して。

美雪 そうそう。そうだったね。

春江 皆で、ここに来て。

美雪 え？ 庭で撮ったんじゃないっけ？

春江 海で撮ったのよ、あの時は。

美雪 そうだったかしら…。

春江 ねえ、お姉ちゃんは新婚旅行するならどこに行きたい？

美雪 え？ どこだろう？ …そんな、急に言われても

わかんないわよ。

春江 私ね、本当は南の島に行きたかったの。新婚旅行。

青い海と、青い空のある所に、二人きりでいくの

にずっと懂れてて。

美雪 あれ？ 結局どこに行ったんだっけ？

春江 行ってない。

美雪 え？

春江 あの頃、お互い仕事が凄く忙しくてさ。結婚式も、

隙をついてやったようなものだったから。結局、

新婚旅行は行けなくて。

美雪 ああ、そうか。そうだったわよね。思い出した。

春江 行けばよかった。

美雪 え、…何、そういうことなの？

春江

や、それが原因でっていうわけじゃないわよ？

美雪 …でも、そういうところからだったのかもしれないなって。今はね、少し、思う。

美雪

そう…。そっか。

春江

ごめん、こんな湿っぽい話。お散歩が台無しね。

美雪

ううん、そんなことないわよ。天気もいいし、久

春江

しぶりに春江と一緒に歩いて、すごくいい気分。

美雪

お返事来るといいね。

春江

ん？

美雪

お手紙。

春江

だから、ただのお礼状だってば。

美雪

でも、封筒がちよっとお洒落だったよね。

春江

もう！ からかわないですよ。

美雪

んふふふ。

春江

…。

美雪

ん？

春江

ううん。なんか、新婚旅行どこに行きたいかなん

美雪

て、私、一度も考えたことなかったなって、思っ

春江

て。

美雪

…。

春江

ねえ、春江覚えてる？ 小さいとき、ランドセル

美雪

しよったまま、よくこの浜辺に来て、日が暮れ

美雪

るまで遊んだでしょう？

春江

ああ、そうだったね。家に帰ると、宿題やりなさいって言われるから、海に行つて。

美雪

桜貝を拾ったり、青い瓶石びんいしを拾ったりして、それでもまだ時間があると、時々遠くに見える船を数えたでしょう？ 船には王子様に乗っていることになってた。まだ、うんと子供だったから。遠い海から、私を迎えに来てくれる、世界でたったひとりひとりの男の人。

…この船は、美雪と春江と、いったいどっちを迎えに来たのか？想像してみた。青い船は北の国の王子の船。白い船は南の国の王子の船。煙を吐くのは、海賊船。海賊の王に嫁ぐのも悪くないと、春江は言う。一生に一度しか乗れない船。いつも遠くに見えていて、絶対に、この浜辺までは来なかった船。

## 2-3-1-1 船を数える

一気に明転。浜辺にいるのは、小学1年生の春江と、小学4年生の美雪である。

春江

ねえ、見てお姉ちゃん！ あれ、きつと海賊船！  
見て！

美雪

海賊船にはね、海賊の王が乗っているのよ。

春江

凄い！ 私、あの船に乗りたい。

美雪

あれは、お姫様じゃないと乗れないのよ？

春江

え？ …海賊なの？

美雪

うん。

春江

え。え。お姉ちゃんは、何姫さま？

美雪

私は、名前に「雪」の字が入ってるから、白雪姫。

春江

はあ、白雪姫。いいなあ！

美雪

うふふふ。

春江

春江は、春江は何？

美雪

春江は、なんでもありません。

春江

えっ…。どうして？ …ねえ、どうして？

美雪

だって、あのお船にはお姉ちゃんお姉ちゃんが乗るから。

春江

…う、う、う。(へそをかきだす)

典子

若き日の典子が浜辺に迎えに来る。

典子

美雪！ …春江！ …もうすぐ、ご飯よ！

春江

あ、おがあさん。う、う、う…。

典子

ほら、いつまで遊んでるの？ 夕方の潮風にずっとあたってたら、風邪ひくのよ？ いつも言ってるでしょう？

美雪

はい。

春江

う、う、う…。

典子

何？ 春江どうしたの？

春江

だ、だって、お姉ちゃんは、白雪姫なのに、春江はなんでも無いっていうんだもん。

典子

ええ？ 何、美雪、そんなこと言ったの？

美雪 違うよ、だって、私は名前に雪の字が入ってるから。春江の名前、春も、江も、お姫様と関係ないじゃん。

春江 う、う、う…。

典子 うーん、そうね、じゃあ、春江は、…人魚姫！

春江 え？ …本当！？

美雪 絶対おかしい。ズルだ。

典子 あら、ズルじゃないわよ？ 春江は名前にさんずいが入ってるから、人魚姫にしときなさい。それでいいわね？

春江 やった！ ねえねえ、じゃ、お母さんは何姫さま？

典子 お母さんは、何姫さまでもないわよ。お母さんは、お母さん。

春江 じゃ、お父さんは何王子？

典子 お父さんは、ただのお父さん。おじさん。王子様じゃありません。

春江 えー、つまんなーい。

美雪 つまんなーい。

典子 つまんなくてもいいの、さ、帰るわよ？

浜辺に、黒木健介がいる。

健介 …典ちゃん？

典子 ？

健介 ああ、やっぱり典ちゃんだ！

典子 え？ …健介さん？！

健介 やあ驚いたな。そうか、杉田との新居は、このあたりだったっけ。

典子 ええ。わあ、驚いた。いつ、こっちに？

健介 今度、東京の百貨店で物産展があつてね。その打ち合わせでこっちに來て。せっかくだから、足を伸ばそうと思つて。

典子 そう。頑張つてるのね。

健介 学生の頃、こちらへんでよく遊んでたろう？ それで、なんだか懐かしくなつて、寄つてみたんだけど。

典子 本当に、久しぶり。

春江 海賊だ。

健介 え？

春江 とても日に焼けている。南の国から來た、海賊の王だ。

美雪 しーっ。

典子 こら、あんた達、何こそこそ言つてるの？

健介 典ちゃん、もう、すっかりお母さんだね。

典子 そんな…。健介さんは、変わらないわね。

健介 やあ、もう、すっかりおじさんだよ。はっはっは。そんなこと。

典子

春江 海賊が笑つた！



美雪

しーっ。

典子

こら、黒木さんよ？ いつも、お蜜柑送ってくだ

さるでしよう？

美雪

お蜜柑？

典子

そうよ、あなたいつも、ひとりですつも4つも食

べてるでしよう？

美雪

…。(何かごによごによ言っている)

健介

そうか、そんなに食べてくれてるの？ ありがとう

う。

典子

ほら、ご挨拶して。

美雪

…こんばんは。

健介

こんばんは。

典子

あの、良かったら、寄ってかない？ すぐそこな

の家。

健介

ああ。

典子

なんにもないけど、お茶位なら。

健介

いや、…やめておこう。

典子

そう。…そうね。

健介

いやあ、本当に驚いたなあ。…新婚旅行の日以来？

典子

ええ。

美雪

新婚旅行？？

春江

お母さん、お腹空いた。寒い。

典子

こら、ひっぱらないの。

健介

ごめんね、時間をとらせてしまつて。じゃ、お嬢

ちゃんたち。もう、海賊のおじさんは行くね。

美雪

お嬢ちゃんじゃなくて、お嬢様なんですけど。

健介

あはははは。じゃあ、お姫様達。おじさんは、

南の海に帰ります。さようなら。

美雪

さよなら。

春江

さよなら。海賊の王。

典子

…。

健介

じゃ、典ちゃんも、お元気で。

典子

健介さんも。

健介

じゃあ…。

健介

去る。典子、後姿を見送っている。

春江

ねえ、お母さん、今日のご飯なあに？

典子

…。

春江

お母さん？

典子

ああ、ごめん。今日はね、クリームシチューよ。

春江

やった！ じゃあ、春江のお皿にはお芋を沢山い

れてね。

典子

はいはい。そうね。

美雪

美雪も、美雪はお芋10個入れてね。

典子

はいはい。

和彦B

健介が去つたのとは違う方向から、和彦が登場。

おう。

美雪 あー！ お父さん！ おかえりなさい。

和彦B ただいま。や、家帰ったらだれも居なかったから、ここかしらと思って。

典子 おかえりなさい。あの、…ごめんなさい。

和彦B なんだよ、別に謝ることじゃないさ。

典子 今日も、お疲れさまでした。

春江 ねえねえ、春江ね、本当は人魚姫なんだよ？

和彦B へえ、それはすごいな。

春江 お父さん、抱っこ。抱っこ。

和彦B コラ、もう大きいんだから、自分で歩きなさい。

春江 えー…。

美雪 …。(健介の去った方をなんとなくそわそわと見ている)

和彦B おい、美雪、置いてくぞー。

美雪 …。(先に行く家族を追って)

杉田家、去ってゆく。誰も居ない海が残る。明転。

## 2-3-1-2 南からの手紙、再び

黒木涼介が現れる。彼の手紙や言葉は、全て宮崎弁のアクセントで話される。

涼介 杉田美雪様。いつも、美しい字の楽しいお便りを

ありがとう。僕も、小さい頃は学校が終わるとよく浜辺に遊びに行きました。日が沈むまで海で遊んだことも、たくさんあります。美雪さん、知っ

## 美雪

ていますか？ こちらでは、夕陽の沈むのがとてより40分近くも、おひさまが海に沈む時間が遅いんです。南だから、という事じゃないんです。町のみんなが、あんまり大らかでのんびりしているもので、おひさまそれに合わせてくれているというわけなんです。笑ってくれましたか？ 駄目だったかな。いつも、あまり面白いことが書けずにごめんなさい。それでは、また。追伸、謎の海賊の王のお話ですが、そのお話、もしかしたら、叔父の健介さんかもしれませぬ。字は、健やかに、お節介のカイと書いて健介と読みますが、どうか

なさいましたか？ 黒木涼介。

先日は、少々おかしな便りを出してしまい、申し訳ありませんでした。おひさまがのんびりと海に沈む話、心の中に思い描いていたら、なんだか知らないうちに、ホロリと涙がにじみました。この頃、少し弱気なのでしょう。涙もろくていけませんね。私もいつか、そのゆったりした夕焼けを眺めてみたいです。お恥ずかしながら、母の典子が、最近もの忘れが目立つようになり、先日から急に、黒木健介さんに手紙を出すと、たびたび言いますもので、よくないとは思いますが、母の抽

斗を見てしまいました。健やかに、お節介のカイと書いて健介。間違いないと思います。叔父様の健介さんと母が交わっていた、古い手紙の束を見つけてしまい…。昔のこととはいえ、父の少し寂しそうな顔を見ると、私なんだかやりきれなくて。何か少しでもご存じのことがあればと思い、あんなことを書いてしまいました。このことは、どうか、ここだけの秘密にさせてください。杉田美雪。遠く見つめ合っている、美雪と涼介。明転。

### 3-1-1 典子の新婚旅行①

1974年。羽田空港。雑踏の音。典子と、和彦Bが、旅行鞆のトランクを手に急いでやってくる。生まれて初めての空港の人ごみの中で、キョロキョロと落ち着かない典子。和彦Bは二日酔いな上に寝不足なようで大あくびをしたりしている。

和彦B あれ…？（目をこすりながら立ち止まってしまっ

典子 和彦さん…。ねえ、急いで！ がんばって！

和彦 ちょっと待って…。

典子 え？ 何？ もう…。本当に飛行機乗り遅れちゃ

うわよ！

和彦B や、チケット。あれ？（ポケットを探っている）

典子 もう、すっかりしてっ！

和彦B ガミガミ言わないでよ、頭に響くから。

典子 あんな時間まで飲んだりするからいけないんでしょ

う！

和彦B あ、よしあった。ああ、びっくりした。

典子 …。

和彦B そんな顔するなよ。

典子 だって…。

和彦B しょうがないだろう。お祝いしてくれるって言う

の、抜けるわけにいかないじゃないか？ 典子さ

んこそ三次会途中で抜けて、俺、上司に嫌味言わ

れたんだぞ？

典子 そんな、だって…。

和彦B 悪かったよ。ごめんなさい。確かに寝坊は俺が悪

かった。謝るから、機嫌直してくれ。この通り。

（頭を下げる）

典子 すぐ、そうやって。

声 典子 （空港のチャイムの音）♪タン・タン・タン・タン・タ

ン）

典子 え？

声 ディスイズザファイナルコール・フォー・ジャパ

ンエアライズ

フライト・ゼロワントゥーファイブ・フォー・ミ

ヤザキ（パッセンジャーズ・オン・デイスフライ

ト・シユドゥビーオンボード・スルーゲート・ナ

ンバーシックスステイーン)

典子 え？ え？ え？ 今、なんて？ どうしよう出  
発しちゃう！

和彦B 違う違う、この便じゃないよ。大丈夫だから。

典子 っ…っ…。(めそめそ泣きだしている)

和彦B あ…。

典子 ごめんなさい、…昨日から、…ずっと緊張してた  
から。

和彦B わかったから、泣かないで？ ね？ …典子さん？

和彦B、典子をなくさめているうちに、いつのまにか機  
内の中で並んで座っている。機内には、素敵な帽子を目深  
に被った新婚カップルがたくさんいる。

典子 っ…っ…。(めそめそ泣きだしている)

和彦B 典子、ね、笑って。泣かないで？ ね？ ほら、

窓の外、見てごらん。

典子 …わあ、凄い。本当に雲の上。天国にいたい…。

男1 ねえ、ほら、窓の外、見てごらん。

女1 わあ、凄い…。天国にいたい…。

男2 ねえ、ほら、窓の外、見てごらん。

女2 わあ、凄い…。天国にいたい…。

和彦B …。(周りが気になる)

典子 ねえ、なんだか新婚旅行の人ばかりね。(小さ  
い声で)

和彦B だって、一番流行ってるとこ、選んだんだもの。

ホテルとるのだって、大変だったんだぞ？ (小さ  
い声で)

典子 うふふ。

和彦B ふふふ。

典子 あの…、ごめんなさい。さっきは、酷いこと言っ  
て。

和彦B や、僕もごめん…。

微笑みあう二人。古いミュージカル映画のように、スナッ  
プとハミングでそつと甘い歌を奏でている新婚さん達。典  
子、窓に張り付いて、窓の外をじつと眺めている。

典子 本当に綺麗…。ねえ、やっとゆっくり、おしゃべ  
りできるね。私達、今、空の上でおしゃべりして  
るのね。

女1 あ、ねえ見て、海！

男1 わあ、凄いな…広い。

女2 あ、ねえ見て、海！

男2 わあ、凄いな…青い。

典子 和彦さん、ねえ見て、海！

和彦B …ぐーっ…ぐーっ…。(イビキをかきながら眠っ  
てしまっている)

典子 …。

和彦B、典子、いつのまにか飛行機から降りて、目的地

の空港にいる。新婚カップルに溢れている空港。典子は怒ってずんずん先に歩いていってしまふ。

和彦B 典子さん、悪かったよ。ねえ：悪かったから。機嫌直して。

典子

：。。。 (お腹を押さえてしゃがみこんでしまふ)

典子 え？ 和彦さん？！ どうしたの？

和彦B …お腹。

典子 え？！ ちょっと、大丈夫？

和彦B …ごめん、少し休ませて。

典子 ああ、どうしよう。すみません、誰か：！

和彦B …大丈夫、ひとまず座れば落ち着くから。

ペンチに座り込んでしまふ。

典子 そんな簡単じゃないでしょ。

和彦B なんだろう。…冷えたのかな？

典子 ね、なんとか宿に行つて、それで横になりましょう？ ね？

和彦B …う。

典子 ほら、歩ける？ (立たせようとして)

和彦B …歩けない。

典子 ああもう。ちょっと、ここで待ってて…！

典子、和彦Bを置いて、退場。和彦が手に、夕刊と郵便物を持って登場。座つてうなだれたままの和彦B。和彦は

部屋の中に座り、和彦Bと、同じ姿で座る。明転。

### 3-1-2 夕暮れの金曜日。

和彦、縁側に座つて、うなだれたままうとうと眠っている。仕事帰りの美雪、登場。

美雪 ただいま…。

うなだれて座っている父を見つめ。

美雪 お父さん？ …お父さん、大丈夫？！

和彦 …ん？ ああ、美雪か。…おかえり。

美雪 ああ、びっくりした。具合悪いのかと思った。もう、こんなところで寝たら風邪ひくわよ？

和彦 …ん…、いつのまに寝てたんだらう。(目をこすつたりして)

美雪 ごめんね、もう少し早く帰るはずだったんだけど。お腹空いてるわよね？ ご飯、すぐ。

和彦 や、今ね、お母さんが作ってる。

美雪 え？ そうなの？

和彦 うん。今日は、私がひとりで全部作るからって言うて、張り切ってたよ。

美雪 そう…。大丈夫かしら？

和彦 大丈夫さ。クリームシチューだって。

美雪 シチューか…。(嬉しそうに)

和彦 なんだか、夢を見たよ。

美雪 夢？ どんな夢？

和彦 お母さんと、新婚旅行に行ったときの夢。

美雪 へえ。

和彦 夢の中は凄いいね、母さんも、俺も、今よりずっとずっと若かった。手なんか、皺ひとつなくてさ、すべすべで。身体もすごく軽い。本当にそんな時代があったのかしら？って思うくらいに。(和彦、和彦Bや、自分の手を見ている)

和彦B、和彦の台詞の中で顔をあげ、立ち上がり、思い出の時間の向こうに去ってゆく。

美雪 そう。

和彦 で、お腹が痛くなるところで、目が覚めて。

美雪 え？ 何それ？

和彦 どうしてあんな夢を見たのかな。

美雪 そういえば、お父さんとお母さんの新婚旅行の話って、ちゃんと聞いたことないわね。

和彦 別に、お聞かせするようなものありませんよ。

美雪 えー、照れないで少しくらい教えてよ。どんなだったの？

和彦 別に、照れてないよ！ 大人をからかうんじゃない。

美雪 いいじゃない。ねえ、どんなだったの？

和彦 あ、お前に郵便来てたよ？

美雪 話聞いてないし…。

和彦 おい、美雪！ お前さんは、誰か居ないのか？！

美雪 え？ …何よ急に。

和彦 誰か、夢に見るような相手は！

美雪 ちょっ、お父さん？！

和彦 や、それは冗談だけどさ。最近、必ず真っすぐ帰って来るから。

美雪 別に、それは…。

和彦 お母さんが、少し気にしてた。自分が心配かけてるせいなんじゃないかって。

美雪 …お母さんが？

和彦 もし、寄り道したいところがあるなら、いくらでもしておいで。お母さんのことなら、ちゃんと、俺だっているんだから。

美雪 だって。

和彦 お父さんじゃ、頼り無いか？

美雪 そんな。そういうんじゃないの。

和彦 え？

美雪 寄り道とか。今は、なんだか思いつかなくて…。

和彦 家に帰って、玄関のドアをあけて、お母さんが、「美雪、お帰り」って、言ってくれるのが、嬉しいの。私の名前、ちゃんと間違えないで、呼んでくれるのが、嬉しいの。そんなこと、考えたこと

もなかったのに。

和彦

…。

美雪

ごめんなさい。ああ、これじゃまるで子供ね。情けない。私、ちょっと、台所、見て来るね…。

和彦

うん。

美雪、台所のある方へ退場。和彦、夕刊や郵便物を片付けようとして黒木涼介から美雪宛の封筒を見つけて思わず手に取る。

和彦

黒木、…涼介。黒木？

なんとなく中身が気になってしょうがないが、開けるわけにもいかず。なんとなく封筒を表にしたり裏にしたり、果ては電灯にちよっと透かしてみたりして。

和彦

…。

若き日の黒木健介が、和彦の前に現れる。

健介

(口笛で、浜辺の歌の短いメロディを吹く)

和彦

え？ …あ。

健介

…。

和彦

黒木先輩？

健介

よう、杉田。

和彦

や、あの、えっと、その…。

健介

おい。

和彦

は、はい。

健介

お前あの時、バッテリー買ってきたよな。

和彦

え？ え？

健介

典ちゃんと3人で、由比ヶ浜に遊びに行ったらう？

和彦

春休み。

和彦

あ。

健介

そう。あの、人生最後の春休みのことだよ。

和彦

覚えてます。黒木先輩に、「負けたんだから、飲み物買って来い」って言われて。あれ？ 俺は、

健介

なんで負けたんだっけ？

和彦

スプライトって、言ったのに、お前はバッテリー買って、大急ぎで走って戻ってきた。

和彦

ご、ごめんなさい。どうしてもスプライトが無くて。…それなんだか、先輩と典子さんをふたり

健介

きりにしたくなくて。

和彦

(大きく笑う)

健介

え？

和彦

冗談だよ。あの時は、悪かった。

健介

…。

和彦

一緒に、浜辺をうんと走ったよな。競争してさ。

健介

は、はい。

和彦

杉田。

健介

え。

和彦

走れ！！

和彦

そ、それはちょっと。

健介　なんだ、負けっぱなしかよ。

和彦　(ぐうっ、と喉の奥が鳴る)

健介　走れ。ゴールは、典ちゃんだ。

和彦　っ…。

健介　じゃ、

和彦　あ。あの、

健介　思い出してくれて、ありがとう。

健介　どんどん消えてゆく。

和彦　黒木先輩！

健介　消える。

和彦　…。

美雪　台所から戻る。ちょっと厳しい顔をしている。

美雪　お父さん。

和彦　どした？

美雪　台所。お母さん、居ないの。

和彦　え？

美雪　サラダとシチューが綺麗にできてて、でも、それっきりで。

和彦　…。

美雪　ねえ、お2階じゃないわよね？

和彦　弾かれたように、走って2階に行く。

美雪　お父さん？！

和彦　すぐに戻ってくる。美雪、和彦のその顔で2階に

居ないことがわかる。

和彦　ちょっと、出かけてくる。

美雪　え？

和彦　典子を、探してくる…！

美雪　え？…ちょっと。お父さん、待って！

和彦　お前は、ここに居なさい。

美雪　でも。

和彦　お母さんが戻ってきた時、誰かいた方がいいから。

美雪　わかった。

和彦　走って退場。

和彦　(声)　いってきます！

美雪　気をつけて…！！

美雪、ひとり部屋に残る。が、気持ちが落ち着かず、気持ち落ち着けるために郵便物を片付けようとして、自分の宛の封筒をふと手にする。差出人を見て、急いで開封すると、便箋と一緒に、一枚の写真と古ぼけた譜面が一枚出てくる。美雪、譜面を裏返したりしてみるが、同梱の意味がよくわからず、便箋を開く。気になる文面だったのか、美雪、貪るように読み進める。

美雪　…。

### 3-2-1 フェニックスハネムーン

明転。再び、1974年。宮崎観光ホテル。和彦Bトイレの中で壁にもたれかかっている。典子、その扉を叩く。



典子 和彦さん? …どう? 大丈夫? お薬、効いてきた?

和彦B …ごめん。正露丸じゃ、ダメみたい。

典子 ダメって…。じゃ、今日もずっとトイレの中にいるつもり?

和彦B ごめん。もう少し落ち着いたら、またちゃんとベッドに横になるから。

典子 でも…。

和彦B 典子、良かったら、どこかで遊んでおいで。

典子 え。

和彦B 僕の鞆に、観光案内の本がある。それを、使って…。このままじゃ、食事と一緒にできないし、…。う。…せめて、典子さんだけでも、ハネムーンを、…満喫…。

典子 ひとりで満喫って。そんなの、ハネムーンじゃないわよ!

和彦B でも、こんなにいいお天気なんだから。もったいないよ。

典子 いいの、一緒におしゃべりできるだけでも。和彦さんを置いてけない。

和彦B おしゃべりとか、もう無理。…辛い。

典子 え。

和彦B ああ、残業代パァだ、くそう。…っ…いたたたた

た。

典子 そんな言い方しないで?

和彦B 僕のことはいいから、さあ、ほら。早く、行ってくれ。

典子 でも…。

和彦B だから、僕の鞆に、ちゃんと、観光案内の本があるから!

典子 そういう問題じゃないでしょう?

和彦B 付箋貼って、マーカーも引いてあるから、…その通りにまわれれば、大丈夫だから!

典子 大丈夫って、どういう意味? 何が大丈夫なのよ!?

和彦B だから、僕の鞆に、観光…っ、痛…っ…! つ…っ…! 大丈夫じゃないわよ。それじゃ一人旅じゃない!

典子 私、ハネムーンに来たのよ? そんな、おしゃべりする相手も居ない旅…

和彦B うるさいな、おしゃべりおしゃべりおしゃべりおしゃべりおしゃべりって! 結婚したんだから、おしゃべりならこれから先幾らでもできるよ! 今だけ黙ってることできないのか?! お願いだから、これ

以上話しかけないでくれ! 少し、ひとりにしてくれ!!! 痛…っ…!

典子 …私、鎌倉には帰らない。

和彦B …え?

和彦B

典子 あっちに戻ったら、すぐ実家に帰りますっ!!

和彦B 和彦さんとは暮らせない! 和彦さんのことなんて、もう知らないっ!!

典子 典子さ……うっ。

典子 黒木健介の実家。電話に気が付いて、健介の祖母が電話に出る。

祖母 はい。黒木ですが。

典子 あ。あの、健介さんはいらっしやいますでしょうか?

祖母 はあ? けん坊?

典子 ☆あの。私、大学の同期の。清水……や、杉田……典子です。

祖母 ★……おい、けんぼー、けんすけー、おまえん電話ど!

典子 ばあちゃん、そんげふてー声ださんでもわかるが。

典子 はい。

典子 ぶつぶついいながら退場。

典子 あの、健介さん、お久しぶりです。典子です。

典子 え、……典ちゃん?

典子 はい。

典子 あ……。どうしたの、急に? 元気?

典子 ……。

健介 ごめんね。せっかく結婚式の案内もらったのに、祝電しか出せなくて。

典子 そんな。

健介 ご結婚、おめでとう。

典子 ……。 (めそめそしだす)

健介 え? 典ちゃん? どうしたの?!

典子 ひ、……ひとりじゃ、……右も左も、わからなくて……。

健介 典ちゃん? 大丈夫?

典子 わ、……今、みや……ざき、……(か)んこう、ホテル

にいるの。(涙のせいで不明瞭に)

健介 何? なんて?

典子 私、今、……。

健介 え?

健介 健介と典子、遠くから目が合う。そのまま、あつという間に再会し。

健介 ……お待ち。

典子 ううん、全然。

健介 久しぶり。

典子 本当に、お久しぶり。

典子 車。(そこに、という風に)

典子 わあ……!

健介 ごめん。急いでたから、軽トラで来ちゃった。

典子 凄い。私、こういうの乗るのはじめて。

健介 ごめん。典ちゃん、せっかく綺麗な恰好してるのに。

典子 ううん。いいの、こんなの。

健介 さ、乗って。

典子 ありがとう。

車に乗り込むふたり。うつすら笑ってはいるが、しゃべらず。

健介 …。

典子 …。

健介 や、なんだかやっぱり、久しぶりだね。へへへ。

典子 そうね。なんていうか、…あはは。

健介 電話。びっくりしたけど、なんか嬉しかったよ。

典子 本当？

健介 うん。

典子 …ごめんなさい。

健介 いいよいいよ、地元なもの。

典子 あの、そうじゃなくて。

健介 え？

典子 手紙のお返事。勝手にやめてしまっ。

健介 あ…。

典子 本当にごめんなさい。ずっと、謝りたかったの。謝りたいって、ずっと、ずっと思ってた。今さら

謝られても、困るかもしれないけど。健介さんは、もう忘れちゃったかもしれないけど…。

健介 典ちゃんは、やっぱり、真面目だね。

典子 え？

健介 ううん。…ありがとう、覚えててくれて。

典子 やだごめんなさい、私、どうしてこんな話…。

健介 いいよいいよ。かわないなあ、典ちゃんは。はは。

典子 健介さんはなんだか、…大人っぽくなつたみたい。

健介 やあ、黒っぽくなつただけだよ。すっかり陽に焼けちゃってさ。

健介、車のエンジンをかける。

典子 うふふ。本当に、いい天気ね…。空が眩しい。

健介 じゃ、奥さん、どちらにご案内しましょうか？

典子 やだもう、…からかわないで。

健介 ラジオ、つけてもいい？

カーラジオから、流れでる音楽。音楽と共に溢れ出る新婚さん達。

健介と典子は、神社（例えば鶴戸神宮）、海（例えば鬼の洗濯岩）、喫茶店（例えばトピカルジュース）、などの、観光名所を楽しく巡る。どこも、新婚さんが沢山いる。新婚さん達は、スナックとハミングで甘い歌を奏でながらステップを踏んだりしている。

最初はお互いひどく遠慮していたものの、少しづつ、気持ちと距離がほぐれてゆく二人。

メロディとリズムに包まれながら、二人の観光は続く。健介は、典子の写真を撮る。

### 3-2-2 黒木の家

二人はやがて、健介の実家を訪れる。蜜柑農家の庭先。

健介 ただいまー。

典子 …。

健介 ただいまー、誰もおらんと？ …座って。

典子、座ると、奥から健介の祖母が現れる。

祖母 おかえり。あらら、お客さん？

典子 こんにちは。

祖母 あらー、まこちーむぞらしい娘さんじゃが。

健介 大学の同期の杉田さん。今、新婚旅行で、こっちに来ちよっと。

祖母 はあ、新婚旅行で？ それはよう来やったなあ。

え？ だんなさんは？

典子 あのと、えっと。(困って健介をチラリと見る)

祖母 えー！！ けんぼーのよめじょ？！ はー、えれこっ

ちゃー！！

典子 え？

健介 違う、違う。

祖母 おーい、けんすけが、やっと、よめじょ連れて帰っ

てきたどー！

健介 ばあちゃん、違うって！

祖母、奥に家人を呼びに言っってしまう。

健介 ごめん、ばあちゃん、最近ちょっとぼかんとしてて。

典子 ううん。

奥から、赤ん坊を抱いた健介の姉が現れる。姉は終始赤ん坊を揺らしている。(姉のしゃべりには、宮崎のアクセントがある)

姉 あらあ、どうも、いらっしやい。

典子 こんにちは。お邪魔します。

健介 あ、俺の姉ちゃん。

姉 …こっちは息子の涼介君ですー。はい、こんにちは。(赤ん坊に挨拶させて) うふふ。

典子 うふふ。あの、清水…あ、杉田、と申します。

健介 大学の時の、グリークラブの。

姉 ああ、あんたあつちでコーラスやつちやったもんねえ。今でもこの子、よくひとりで歌、歌っちゃいます。白いギターで。

健介 やめんや、ちょっと。

典子 いつもお蜜柑を送っていたでいて、ありがとうございませう。

健介 果樹園が見てみたいっっちゃうかい。案内しようと

思つて。

姉 ああ、そう。まあ遠くまでようこそ。いつまでここに？

典子 明日です。

姉 ああ、そう。今、お茶が来ますから。

健介 お父ちゃんは？

姉 もう、寝ちよる。今日は、あんまり足のあんべが良くないかい、先に休むて。

健介 そう…。

祖母、お茶の乗った盆を持つて出てくる。茶托に乗った

お茶を典子に出して。

祖母 どうぞ…。まこちよー、けんぼーのところに嫁に来てくれて。

健介 ばあちゃん、お嫁さんじゃねーかいね？

祖母 え？ どういうことや？

健介 友達やが、学生んときのこと。

祖母 でも、新婚さんみたいになかつこうしちよるが。

健介 典ちゃんは、他の人と新婚旅行で来ちよると。

祖母 はあ。じゃ、なんてひとりでここに来たことや？

健介 いいじゃろ、色々あつとよ。

典子 あの、連れが、…急に身体を壊しまして。

祖母 そんな男、やめちよきない！

健介 ちよつ、ばあちゃん。なん言つちよつとや！

祖母

男はね、優しくつて、身も心も丈夫なつが一番いいとよ。けんぼーはね、雨ん中で樹木の世話したつて、風邪ひとつひかんやろ？ そんな男にしちよきない。そんげな人と一緒なれば、一生間違いないつちやが。(典子の手をとつてにここにこと)

姉 おばあちゃん、ほら、典子さん、困つちよりやるが。

典子 いえ…。

祖母 まあ、じゃ、どうぞごゆっくり。年寄りには、奥にひつこんじよります。うふふ。

祖母、退場。

姉 ごめんなさいね、なんだか。

典子 いえ、そんな全然。

姉 この辺は皆、暑さで頭がやられちよるもんやかい。うふふふ。

典子 え、や、やだ、そんな。

姉 ね、焼き菓子いただいたのが、無かつたつちやね？

典子 あつたやろ？

健介 え？ なかつたちゃねえ？

姉 ちよつと、見てくるわ。お口に合うかわかりませんが…。

典子 あの、お氣遣いなく。

姉、台所とおぼしき方向に退場。

健介 ごめんね。落ち着かなくて。

典子 ううん。とっても楽しい。

健介 そんならいいけど…。

典子 なんだか、不思議ね。

健介 え？

典子 健介さん達のおしゃべり聞いてると、ふわって、

柔らかい気持ちになる。ゆっくり、にっこり、したくなる。

健介 そう？ そうかな？

典子 ああ、なんだか、やっと旅に来た気がする。

健介 (笑って) みかんの木、見に行こうか？

典子 え、でもお菓子は？

健介 出てこないと思う。今朝、俺が食べちゃったから。

典子 まあ。うふふ。

健介 一本だけ、特別なみかんの木があってね、さっきのばあちゃんよりも長生きな木で。俺、七五三の時、じいちゃんに手を引かれて、その木に挨拶に行っただ。

典子 へえ…。

健介 もう実はそんなに採れないんだけど、でも、じいちゃんも父ちゃんも、なんでか、その木を切らなかったんだよね。その木は、じいちゃんのそのまたじいちゃんの代から、ずっとこの丘の上で生き

ていて、今日も、生きていて…。

健介と典子、蜜柑の丘を見つめている。明転。

### 3-3-1 日暮れの町

2010年代の和彦、典子を探して町の中を、必死でぐるぐる走っている。

健介と典子、退場する。

和彦 …。(息が切れ、街角のベンチに座り込む和彦)

座り込んだ和彦の、目に耳に、浮かび上がる、ひとつの思い出。ありし日の浜辺の邂逅。

(2-3-1-1の美雪の目線とは逆さまに、ここでは和彦B

の目線のように描かれる)

春江 あ！ 海賊が笑った！

和彦 春江と…

美雪 しーっ。

和彦 美雪と…。

典子 こら、黒木さんよ？ いつも、お蜜柑送ってく

さるでしょう？

和彦 典子と…。

美雪 お蜜柑？

典子 そうよ、あなたいつも、ひとりですつも4つも食

べてるでしょう？

美雪 …。(何かごにょごにょ言っている)

健介 そうか、そんなに食べてくれるの？ ありがと

う。

典子 ほら、ご挨拶して。

美雪 ……こんばんは。

健介 こんばんは。

典子 あの、良かったら、寄ってかない？ ……すぐそこ

なの。家。

健介 ああ。

典子 なんにもないけど、お茶位なら。

健介 いや、…やめておこう。

典子 そう。…そうね。

和彦B、登場。遠くから、家族と健介を発見して、なぜ  
か思わず身を潜めてしまう。

和彦B ……!!

健介 いやあ、本当に驚いたなあ。…新婚旅行の時以来？

典子 ええ。

美雪 新婚旅行??

春江 お母さん、お腹空いた。寒い。

典子 こら、ひっぱらないの。

健介 ごめんね、時間をとらせてしまっただけ。じゃ、お嬢

ちゃんたち。もう、海賊のおじさんは行くね。

美雪 お嬢ちゃんじゃなくて、お嬢様なんですけど。

健介 あはははは。じゃあ、お姫様達。おじさんは、  
南の海に帰ります。さようなら。

美雪 さよなら。

春江 さよなら。海賊の王。

典子 ……。

健介 じゃ、典ちゃんも、お元気で。

典子 健介さんも。

健介 じゃあ…。

健介、去る。典子、後姿を見送っている。和彦Bなかなか  
出られずにいる。

春江 ねえ、お母さん、今日のご飯なあに？

典子 ……。

春江 お母さん？

典子 ああ、ごめん。今日はね、クリームシチューよ。

春江 やった！ じゃあ、春江のお皿にはお芋を沢山い

れてね。

典子 はいはい。そうね。

美雪 美雪も、美雪はお芋10個入れてね。

典子 はいはい。

美雪、春江、典子、健介とは逆の方向に去ろうとする。

典子の進む方から和彦B登場。

和彦B おう。

美雪 あ!! お父さん! おかえりなさい。

和彦B ただいま。や、家帰ったらだれも居なかったから、  
ここかしらと帰って。

典子 おかえりなさい。あの、…ごめんなさい。

和彦B なんだよ、別に謝ることじゃないさ。

典子 今日も、お疲れさまでした。

春江 ねえねえ、春江ね、本当は人魚姫なんだよ？

和彦B へえ、それはすごいな。

春江 お父さん、抱っこ。抱っこ。

和彦B コラ、もう大きいんだから、自分で歩きなさい。

春江 えー…。

和彦B …。(健介の去った方を、少し気にして去ってゆ

く)

美雪 …。(健介の去った方をなんとなくそわそわと見

ている)

典子 ほら、美雪、置いてくわよー！

美雪 …。(ぼーと走り去る)

若き日の典子も、海辺から去ろうとする。和彦、思わず  
呼び止めるように叫ぶ。

和彦 典子…！

典子 …。(気が付き、振り向いて和彦を見るが、微笑

み返して去る)

典子、去ってゆく。思い出を映画のように見つめていた

和彦。

和彦 …！(典子の行き先がふと思い当たり)

和彦、典子を探して海の方角に走り去る。

どこからか聴こえてくるカーラジオのハミング。

#### 4-1-1 夜の海

1974年。夜。典子と健介、軽トラの中にいる。カー  
ラジオが流れている。

健介 …ごめんね、遅くなっちゃって。

典子 ううん、私こそ、お夕飯までいただいちゃって。

健介 ばあちゃんの田舎料理ばかりで。(謙遜し)

典子 ううん、すごく美味しかった。お刺身が甘くて、

感動しちゃった。

健介 それは醤油が甘いんじゃないかな？ ははは。

典子 やだそんなんじゃないわよ。お魚の身がとってても

甘くて。

健介 じゃあ、満足してもらえましたか。

典子 本当ありがとうございます。

健介 良かった。…よし、着いた。

典子 え？

健介、車を止めて、カーラジオも止める。

健介 …おやすみ。

典子 あ。

健介 うん。

典子 …。

健介 そうだ。良かったら、新居の方にも蜜柑を送るよ。

典子 …。



健介 典ちゃん？

典子 ……もう少しだけ。

健介 え。

典子 や、あの、どこかもう少しだけ、寄り道しちゃ：

ダメ？

健介 ……

典子 ごめんなさい。色々連れてってもらったのに、我

儘言って。

健介 ……

健介、車のエンジンをかけて、もう一度、カーラジオを  
つける。

車は走って、昼間観光したのとは違う海（一ツ葉海岸）

に辿りつく。夜の海岸に立つ、典子と健介。二人を包み込

むような波の音。溢れる月光。

典子 わぁ…！（思わず息をのみ）

健介 ……

典子 綺麗…。（絶景に思わず目が潤み）

健介 うん。

典子 すごい…。海と夜空しか無い星に來たみたい。

健介 （優しく笑う）。

短い間。

典子 ……水平線。

健介 水平線。

典子 お月さま。

健介 お月さま。

典子 波が、ゆらゆら、光って。

健介 波が、ゆらゆら、光っているね。

典子 ……もう。（マネしないで、と笑って）

健介 ふふふ。

典子 私、生まれて初めて見た。綺麗な、夜の水平線。

健介 典ちゃんに、海の写真を送ったことがあったでしょ？ 手紙と一緒に。

典子 ええ…。

健介 この風景も送ってたかったんだけど。夜の海、コン  
バクトカメラじゃ、映らなくて。

典子 ありがとう。連れてきてくれて。

健介 ……♪（口笛で短くメロディを吹く）

典子 ……♪（あわせて歌う『浜辺の歌』。昔のように）

健介、思わず、典子の手を握ってしまう。歌、止まる。

しばし、手を握ったまま。

健介 ……ごめん。

二人、海を見つめたまま手をほどかない。むしろそっと

握り直したりしている。

典子 そんな…、謝らないで。

健介 ごめん。ダメだよ、……こんな。

典子 違うの。ダメなの、私の方。

健介 え？

典子 帰りたくないって、一瞬でも、思ってしまった。

健介 …。

典子 ごめんなさい。こんなこと言っちゃいけないの、

ちゃんとわかって(るんだけど)、…くっしゅん！！

(典子、豪快なくしゃみが出てしまい、鼻を噉っている)あ、あら、やだ。

健介、 思わず笑って。典子の手をほどく。

健介 (笑いながら)少し、夜風に当たりすぎたね。

典子 ううん、そんな。

健介 ちょっと、車、見てくる。毛布か何か、あったはずだから。

典子 え。

健介 ここでひとりで待つの、怖くない？

典子 全然、大丈夫。海と月しかないもの。

健介 典ちゃんが、もし本当に帰らないなら、僕は、お

ひさまが出るまで一緒にいるから。

典子 …。

短く見つめ合い、健介、退場。典子、ひとりになる。波の音と月光が、典子を包み込むように大きく迫ってくる。

典子 あ…、月が。

典子、 ますます輝く月をみあげたまま。

典子 健介さんへ。あの日、出せなかった手紙は、いま

も抽斗の中に眠っています。出せない手紙なのに、

なんども続きを書きました。健介さん。私、本当

はいつたい誰と新婚旅行に行ったのかしら？ 思

い出そうとするたび、あの日の海が、目に浮かぶ

んです。お月さまの下。波が、ゆらゆら光って、

細い銀色の線を引く、何本も、何本も、海に浮か

んでは消える、光の線。夜空いっぱい、波の音

が静かに響いて、懐かしい歌みたいに聞こえて。

私達は、ずっと水平線を見ていた。優しい夜風の

中で、ふたりきりで。(若き日の典子は、言葉の

中で時を重ねて、いつの間にか老女になっている)

健介さーん…!! (老女は渾身の想いで彼方の健介

の名を大きく呼び)そちらの海からも、見えます

か？ 今、水平線の上を、船が一隻、白い煙を吐

きながら通ってゆきます。…あら？ …船が、…

こっちにやって来る！

和彦 (68)、浜辺に登場。

典子…!! (走り過ぎて息が切れている)

和彦 え…。(振り向く)

典子 ああ、良かった。ここじゃないかと思って。

和彦さん。

和彦 さ、帰ろう。家にも。

典子 でも。

和彦 あまり、海の夜風にあたるとよくないよ。さ、帰っ

て、皆でシチューを食べよう。冷めないうちに。

典子 シチュー？

和彦 そうだよ、作ってくれただろう？

典子 私が？

和彦 う、うん。美雪のやつ、喜んでたぞ？ さあ…。

和彦、典子の側で促し、先に立って歩いてゆこうとする  
るが、典子、ついてこない。

典子 …。

和彦 典子…？

典子 和彦さん、私、思い出せないことがあるの。

和彦 え。

典子 私、…どうして、あなたと一緒にだったんだろう。

和彦 …。

典子 ごめんなさい。酷いこと言って。でも、ずっと思

い出せなくて。どうしても思い出せなくて。思い

出せないのにそばにいる自分が、なんだかとても

不安で。

短い間。

和彦 …忘れていいよ。

典子 え。

和彦 思い出、全部、忘れてもいいよ。

典子 …。

和彦 忘れていいから、帰っておいで。

典子 和彦さん。

和彦 玄関のドアをあけたら、美雪に、ただいまって、

言ってやってくれ。春江が実家に戻る日には、お

かえりって言ってやってくれ。あとのことは、全

部、忘れてもいいから。…さあ、帰ろう。

短い間。和彦、思い切って典子に手を差し出す。典子、  
和彦と手をつないで歩き出す。

退場。誰もいなくなる夜の海。誰もいなくなった海に、  
毛布をもたないままの健介が戻ってくる。健介、典子の居  
た場所を見つめ、月を見つめ、ひとり座っている。

#### 4-2-1 宿にて

1974年。典子、ホテルの部屋に戻る。和彦(B)ソ

ファでうとうとしている。

典子 …。ただいま。

和彦 B …。

典子 ただいま。

和彦 B あ、…おかえり。

典子 大丈夫…？

和彦 B うん。ぐっすり寝たら、やっと落ち着いてきた。

(あくび)

典子 ごめんなさい。

和彦 B え？

典子　こんなに、遅くなってしまっ

和彦B　いいんだ、帰ってきてくれたんだから。あのまま、

飛行機で実家に帰っちゃったかと思ったよ。

典子　そんな…。

和彦B　おかえりなさい。

典子　うん。

和彦B　楽しかった？

典子　え？

和彦B　観光とか、したんでしょ？

典子　ああ、ええ…。楽しかったわ。

和彦B　そうか、良かった。本当に良かった。

典子　…。

和彦B　ああ、でも。お腹痛くなったのが典子さんじゃな

くて、本当に良かった。

典子　…。(言葉がふと沁みて、和彦Bの顔を見ている)

和彦B　…。(微笑む)

和彦Bの顔を見つめている典子。見つめ合ったままのふたり。明転。

#### 4-2-2 涼介からの手紙

涼介が、ひとり座っている。(涼介のことは、宮崎のアクセントで語られる)

涼介　美雪さん。今日はお手紙、長くなってしまいごめ

んなさい。美雪さんは、ひとりで夜の海に行った

ことはありますか？ 健介叔父さんは、そのまま

暫く、ひとりで海を見ていたそうです。そうして

やっと車に戻ると、ワイパーに挟まれた、小さな

走り書きを見つけました。喫茶店のコースターに、

青いインクで、「健介さんの生まれた町を、見せ

てくれてありがとう」。典子さんの字と一緒に、

ふたりで飲んだ、ジュースの染みが、細い三日月

みたいに、滲んでいました。これが、叔父さんの

日記に書いてあった全です。健介叔父さんが亡

くなってからずっとしよんぼりしていた母も、こ

の三回忌に、やっと叔父さんの部屋を片付ける決

心をし、良く晴れた日に、一緒に抽斗をあけまし

た。叔父さんが残したものは、ほんとうに僅かで

した。日記帳と、手紙の束。それと、女の子のい

るお店の領収書が数枚。(領収書を)なんでとっ

ちよったっちゃろ？ でも叔父さんが本当に残し

てくれたものは、やっぱりみかんの木なんだと思

います。典子さんへ、と書かれた茶封筒に入っ

いた、海の写真、一枚。古い譜面、一枚、お送り

します。どうか、叔父さんの忘れ形見にしてやっ

てください。それでは、また。杉田美雪様。黒木

涼介。

4-2-3 浜辺の歌

美雪、送られた譜面の音を、ポツポツと辿って、そっと歌ってみる。『浜辺の歌』であることがわかる。

人々、それぞれの場所で歌に混ざってゆく。春江、和彦もあらわれ、一緒に歌い続ける。

歌の中で、白黒映画のような擦り切れた思い出が束の間浮かぶ。

1968年。グリークラブの部室。『浜辺の歌』の譜面を見ながら歌っている典子。

部室に、入ってくる健介。

健介 …あれ？

典子 あ。あの、こんにちは。私、今日から、グリークラブに。あ、もうドアが開いてたもので…。

健介 ああ、よろしく。2年の黒木です。

典子 清水典子です。私も2年。よろしくお願いします。

健介 …はじめまして。

典子 はじめまして！

典子の元気な挨拶に、思わず笑いあう、初めて出会った日のふたり。

人々の歌声、大きくなる。暗転。優しい闇の中で、ふたりの歌声も消える。

4-3-1 夕風の少し後

誰も居ない、杉田家の居間。春江が四人分のお茶を淹れて、持ってくる。

お盆を置くと、2階のある方にゆき、階段の上に向かっ

て。

春江 お茶がはいりましたよー…！

すると、和彦だけが戻ってくる。

和彦 お、ありがとう。

春江 お母さんと、おねえちゃんとは？

和彦 ダメだ、あれじゃいつまでたっても出かけられないよ。箆笥とにらめっこで。

春江 あらら。

和彦 そんなにジタバタしてもなあ。

春江 いいじゃない。嬉しいのよ、お母さん。ちゃんと

写真館で撮るのなんて、随分久しぶりでしょ？

和彦 まあ…。

春江 私も、お伴のついでに、お見合い写真撮り直そう

かしら。

和彦 こら、なんてこというんだ！

春江 うふふふ。

典子と美雪が降りてくる。

春江 あ、…ほうじ茶で良かったよね？

美雪 ああ、ありがとう。

和彦 あれ? …なんだ、結局最初の恰好と同じじゃないか。(典子に)

典子 すみません。

美雪 いいじゃない、散々迷って、やっぱりこれでってなったんだから。

典子 すみません。

和彦 典子は、いつもそうなんだから。(まんざらでもない)

美雪 いいじゃん、もう。…お母さん、ほら笑って?

春江 お母さん、綺麗よ?

典子 ありがとう。

春江 (笑って) ねえほら、いつだったっけ、お姉ちゃん

典子 大人の成式だっけ? あの時も確か、お母さんが

春江 ブローチ…。

典子 あら…?!

美雪 ええと…。私、どこにやったかしら? …真珠のイヤリング。

典子 私、しまったわよ。抽斗の中。大丈夫。

美雪 そう? …美雪、ありがとう。

和彦 …。(微笑んで)

美雪 おい、せっかく写真館で撮るんだから、やっぱり、お前達も入りなさい。

美雪 いいのよ。今日は、二人で撮って欲しいの。

和彦 でも。

美雪 お父さん、照れないで。

和彦 やっぱり、散髪に行けばよかったかなあ…。

春江 あ、ねえ、時間、そろそろ。

美雪 あらやだ。

和彦 よし、いこう…!

和彦、ひとりでどんどん玄関に行ってしまう。

美雪 え、ちょっと待ってよ、お父さん!

春江 じゃ、お母さん、行こうか。(母に寄り添い)

典子 はい。じゃ、…あと、お願いね。

美雪 はーい。お夕飯、楽しみにしてて。

典子 行ってきます。

春江 行ってきます。

美雪 行ってらっしゃい。

典子と春江、玄関の方へ退場。

和彦(声)

おい! 早く。

美雪 お父さんも、行ってらっしゃい!

和彦(声)

行ってきまーす!

美雪 …。

ひとり、部屋に残った美雪。家族の残した湯呑茶碗を片付けたりしている。

夕暮れの赤さに、思わず空を見る美雪。

美雪

黒木涼介様。お元気ですか？ またお便りできることを、とても嬉しく思います。いつもと同じ夕焼け空を見ながら、この手紙を書いています。そちらより、少し早く沈む夕日のことです。今日は、父と母の結婚記念日だったので、妹の春江のアイディアで、二人の記念写真を贈ることにしました。春江は相変わらず、休みのたびに戻ってきます。でも、別れて実家に戻るといってもいいし、私にはまだやっぱり、夫婦のことはよくわかりませんが、でも今年は特別、父と母の並んだ写真が撮れることを、嬉しく思います。譜面、写真、本当にありがとうございます。涼介さん、私もしかったです、ゆったりした夕焼けを見ることが出来るかもしれません。父が、何十年かぶりに、母と旅行に行く計画を立てているのです。夫婦水入らずでも思いましたが、母ももう古希を迎えている身の為、私をお伴につけては、という話になって…。思い切って書きます。もし、そちらに行くことになったら、ご挨拶を、させてい

ただけませんか？ 何度も、書いては消しているうちに、随分時間が立ってしまいました。今、ちょうど、そちらの夕日の沈む頃でしょうか？

杉田美雪。

4-4-1-1 浜辺のふたり

ゆっくりと、浜辺を歩き続ける老夫婦の姿がある。和彦と、典子である。

砂の上に、ふたりの並んだ足跡が、どこまでも続いている。

和彦 …。

典子 あ。

和彦 …。

典子 ね、和彦さん、見て。

和彦 ん？

典子 ほら、あそこ。飛行機雲。

和彦 …。(空をみあげる)

典子 …。

浜辺で、いつまでも空を見上げているふたり、優しく波の音に包まれて。

おわり

【引用楽曲】 ※共にパブリックドメイン

○『浜辺の歌』 大正2年（1913年）

作詞 林 古溪  
作曲 成田為三

あした浜辺をさまよえば

昔のことぞ忍ばるる

風の音よ

雲のさまよ

寄する波も

かいの色も

ゆうべ浜辺をもとおれば

昔の人ぞ忍ばるる

寄する波よ

かえず波よ

月の色も

星のかけも

○『金糸雀（かなりや）』 大正7年（1918年）

作詞 西條八十  
作曲 成田為三

歌を忘れたカナリヤは

うしろの山に捨てましようか

いえいえ、それはかわいそう

歌を忘れたカナリヤは

背戸の小藪に埋けましようか

いえいえ、それはなりませぬ

歌を忘れたカナリヤは

柳の鞭でぶちましようか

いえいえ、それはかわいそう

歌を忘れたカナリヤは

象牙の船に銀のかい

月夜の海に浮かべれば

忘れた歌を思い出す



吉田小夏  
青☆組 主宰  
劇作家・演出家



1976年生まれ。

横浜市出身。

2001年に青☆組を旗揚げ。

『雨と猫といくつかの嘘』、『時計屋の恋』等、4つの作品で日本劇作家協会新人戯曲賞に入賞。『パール食堂のマリア』で、平成28年度（第71回）文化庁芸術祭参加。

時空を自由に操る空想力に溢れた演出と、音楽的な台詞が織りなす、物語性の高い作品群が特徴。心の琴線に触れる美しく繊細な対話劇で、幅広い年代の支持を集めている。

近年では、ラジオドラマの脚本や、こども達と親子に向けた演劇の創作など、幅広く活躍。

子どもに見せたい舞台 vol.10『モモ』（2016年）では、翻案・演出を担当し、シリーズ最多動員を記録。脚本を担当したNHK-FMシアター『星降る教室』が、平成28年度文化庁芸術祭ラジオドラマ部門に選出された。

全国各地での滞在制作や、市民や中高生との演劇ワークショップにも精力的に取り組んでいる。

受賞歴（ノミネート含む）

- 2002年 第8回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞（最終候補）『うちのだりあの咲いた日に』
- 2003年 日本演出者協会主催「若手演出家コンクール2002」優秀賞受賞『さくらさくら』
- 2004年 日本演出者協会主催「若手演出家コンクール2003」作／演出部門 審査員特別賞受賞『初雪の味』  
第10回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞（最終候補）『時計屋の恋』
- 2007年 第13回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞（最終候補）『おやすみ、枇杷の木』
- 2009年 第15回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞（最終候補）『雨と猫といくつかの嘘』  
第9回AAF戯曲賞最終候補ノミネート『ころろ』（原作・夏目漱石）
- 2011年 第11回AAF戯曲賞最終候補ノミネート『忘却曲線』
- 2014年 第2回せんだい短編戯曲賞最終候補ノミネート『butterflies in my stomach』

# 選 評

## 審査結果

大賞 なし

優秀賞 「Sの唄」 藤原佳奈（東京都）

「海の五線譜」 吉田小夏（東京都）

## 審査員

長田育恵（演劇ユニットてがみ座主宰）

斎藤 歩（公益財団法人北海道演劇財団常務理事・芸術監督）

土田英生（MONO代表）

畑澤聖悟（劇団「渡辺源四郎商店」主宰）

前田司郎（五反田団主宰）

### ※第1次審査通過作品

「ブルーマウンテン号の卵と間違い探し」	イトウ	ワカナ	（北海道）
「船の行方知らず」	合田	団地	（京都府）
「ひみつ箱」	鈴木	穰	（東京都）
「あの町から遠く離れて」	土橋	淳志	（大阪府）
「チャットルームでなぐり合い！」	中野	守	（兵庫県）
「めくじら尺」	平石	耕一	（埼玉県）
「Sの唄」	藤原	佳奈	（東京都）
ミュージカル「DAICHI」	まき	りか	（東京都）
「カノン」	村上	典子	（東京都）
「海の五線譜」	吉田	小夏	（東京都）

## 長田育恵

(演劇ユニットがみ座主宰)

昨年に続き優秀賞二作という結果になりました。それは、この戯曲賞が「応募作の中から相對評価で優れた作品を選ぶ」わけではなく、私たちが抱く、より大きな問いと不可分であるからだと思います。

熱量を持つ戯曲とは。読み手をどうしようもなく突き動かし、あるいは何かしら見過せないものを孕む戯曲とは。そうした意味で、演劇に携わる創作者という同じ視点で、各作品と対話するように読みました。全体的な印象として、今回の最終候補作は、危なげない地点で戦っている作品が多く、もっと、書かざるを得なかった作者の切実さに触れたいという思いが募りました。その中で、幾つかの作品について触れます。

『ブルーマウンテン号の玉子と間違い探し』家族という共同体を考察することへ身体的にアプローチしようという試みに惹かれました。けれど問いかけの間口を広く設けたものの、ここからが検証の本腰というところで手控えている。リズム感と身体感覚という武器があるのだから、もっと欲張りになってもいいのでは。

『あの町から遠く離れて』冒頭でかなり引き込まれたのですが、進むにつれてエピソードが既視感のあるものとな

り、複数のラインを手堅く回収した印象。世界観の魅力が、「ゴドー」など既存作品に大きく依っていたのが残念。けれど、軽やかな発想や文体、場面展開の妙など、作者のほかの作品も読みたいと強く思わせられました。

『DAICHI』候補作中、唯一のミュージカルに言及します。この主題を書くためにミュージカルの手法を使うことは正攻法。誠実に書かれていました。反面、主題と形式に甘えてしまう危険が。史実から着想を飛翔させ、よりドライに捉え直すことから作品の可能性を探ってほしい。近年、市民参加型の作品を創る企画が多いからこそ、オリジナルミュージカルの強度や豊かさをもっと貪欲に求めていきたい。

『Sの唄』語り手一人ですが、様々な情景が体感できました。作者の五感が生きた文体に最も強く惹かれました。唄うことで演じ手が異層に入っていくことも、その戻り際に妙に生々しく感じられそう。小品ながら、作者が今、この作品を書かなければならない切実さと力強さを最も感じました。作者の才が光る一作だったと思います。

『海の上線譜』一本推すならばこの作品だと審査会に臨みました。戯曲構造、技術、世界観の美しさなど候補作の中では随一だと。この作品で特に印象深いのは、新婚旅行先で単独行動することになった新妻が、かつて恋した男に再会し、一線を越えるかどうか揺らぐ場面。登場人物たち

の暗部をも含めて描き出されていれば、より大きなうねりを生んだのではないか。「安心して観ていられる作品」から一步も二歩も踏み出していったのでは。残念ながら、ほかの審査員たちを動かすところまでには至りませんでした。

## 齋藤 歩

(公益財団法人北海道演劇財団常務理事・芸術監督)

今年こそはと10作品を読ませていただきました。12月の審査会が豪雪のため流会となり、1月に延期されたことで、更に読む時間を得ることができたのですが、やはり群を抜いた大賞に推したい作品を見出すことができないまま、審査会に臨みました。

大賞とまでは行かないが『あの町から遠く離れて』は、巧みな構成や、散りばめられた一見無意味に見える伏線が次々に回収される快感から、軽快に読み進めることができました。しかし、軽快に読んだというだけで、なぜ「ゴドー」である必要があるのか?など、劇作家がそれを選んだ根拠のようなものが乏しいのではないかと感じました。それを書いた劇作家にとって「個人的な切実さ」のようなものが必要なのではないかと思えます。

書かざるを得ないほどの衝動、とまでは言いませんが、創造する集団性に阿ったり、経済に左右されたりするので

なく、戯曲として自立していて、その人しか書けない、他に類を見ないものを、どうしても期待してしまうのです。巧みであったり、上手であったりするだけでは、私は嫉妬できないのです。そういう点で、審査員の皆さんとの議論の中で『Sの唄』と『海の五線譜』には、その劇作家たちが固有の切実さを持ち、何かを振り切っても進もうとする意志のようなものを感じるのだと思います。

2作品とも私が突き動かされるほどの作品ではありませんでしたが、そうした力や個人的な創作根拠のようなものを感じて、私も納得して優秀賞に選ばせていただきました。3年間で1回しか大賞を選ぶことができなかったのはとても残念です。しかし、昨年の大賞を選べなかった時の議論を経て、今年の作品に向き合ったとき、やはり前年の議論を捻じ曲げて北海道戯曲賞の志を貶めてはいけないという認識を審査員全員が共有していたのです。

今後北海道戯曲賞というものが、北海道戯曲賞固有の理念と、大きな志を築き、貫いて行くことが望ましいと考えています。

## 土田 英生

(MONO代表)

昨年の審査会は雪の為に中止になり、仕切り直した二ヶ

月後の審査。読んで間もない興奮は去り、逆に冷静な話し合いになった気がする。けれど、最後、「大賞を出すのか出さないのか」から、発表された結果になるまでは随分と言葉を交わした。魅力と欠点を同じ秤で比べられない難しさがあった。結局、優秀賞二作品に落ち着いたが、構造としてよくできているのは『あの町から遠く離れて』、言語感覚は『Sの唄』、全体のまとまりは『海の五線譜』という感じで、最後まで意見は割れた。大賞を出すにはどうしても決め手に欠けた。昨年との比較もあり、安易には決められなかった。それぞれの作品についての印象を書かせてもらおうと思う。

台詞は『Sの唄』が突出していると思った。語られるエピソードも陳腐でなく、それでいてリアリティがあった。ただ、一人芝居いとうこともあって、魅力のほとんどが一人称で語られる言葉にあるのが気になった。構成に少し工夫が欲しい。最後、誰も客のいない中で、一人で語り歌っているところ、誰も客のいない中で、一人で語り歌っているのだが、だとしたら、前半を「最後のライブ」をやっている体で、そのタイムラインを面白く示してくれたらと思う。エピソードの中に出てくる「最初にやったライブ」と現在進行しているライブが混在していて分かりにくい。

『海の五線譜』は人の過ごした時間を感じさせてくれる作品だった。ただ、健介と典子、そして和彦の過去の関係

が描き切れているとは言いがたく、その分、現在の夫婦の有り様に抱く感慨が弱くなっている。新婚旅行先での出会いなど、都合のいい展開も気になった。

最後まで悩んだのは『あの町から遠く離れて』だ。構造的にもとてもよく描けていて、エンターテイメントとして読ませる力がある。気になったのはゴドーをベースにアトムやゴジラなど、創作物からの引用が多すぎることだ。使い方がうまいという印象ばかりが残ってしまう。その登場する人びとの魅力がもっと突き出て来て欲しかった。

『ひみつ箱』は過去に遡って行く中で、二人の変遷がわかるのはオーソドックスな手法で飽きずに読めた。ただ、その年月の変化に驚きを感じられないのもったいなかった。

『船の行方知らず』。興味を惹かれる台詞はあったが、出ていった女、彼女を愚直に探し続ける男の存在が立ち上がってこない。女はなぜ出て行ったのか、なぜ戻ってきたのか、男はどうして探すのか？ 具体的な理由はいらないけれど、了解感が必要だと思う。

『ブルーマウンテン号の卵と間違い探し』。次男が性犯罪を起こしたその後の家族。船の上が抽象的な表現にするならば、家族のシーンは実際に何が起きているのか、どんな会話がなされていたのかなどを具象的にしなければ構造自体が意味をなさないのでないか？

『チャットルームでなぐり合い!』は着想は面白いけれど、五味や一井、四日さんなどが知り合いであることにリアリティを感じられない。納得させる仕掛けを工夫すべき。『めくじら尺』。現在に続く過去がしっかり調べて書かれ、それをあえて言葉などを変えることによってフィクションと成立させようという試みは良かった。ただ、台詞が説明的でこなれていない。また、登場人物が多いせいもあり、それぞれが生かし切れていない印象だった。俊介の背景なりをドラマにしてほしい。

ミュージカル『DAICHI』に関しては、正直、どう捉えて評価していいのか判断ができなかった。戯曲としては成立していない気がする。大地の死を都合よく使い過ぎだと思う。

『カノン』は面白くなりそうな気配はあった。けれど、登場人物のやるせなさが立ち上がってこない。長男と父がどんどんという音でコミュニケーションを取るの面白いのだが……。関係ないことだが、台本が読み辛すぎた。人が読むものだとこのことを少し考慮してもらえると有難い。

## 畑澤 聖悟

(劇団「渡辺源四郎商店」主宰)

3 回目の北海道戯曲賞であり、審査させて頂くのも3回

目である。過去2回に較べて一定の水準を満たす作品が揃っていたように思うが、突出した何かには出会えなかった。それでも大賞を出すかどうかについて審査員一同議論を重ねたが、残念ながら前回に続き今回も大賞なしとなった。

『Sの唄』は一人芝居。コンサート中のシンガーソングライターの歌とMC。主人公はいわゆるイタい女なのだが、その自意識過剰ぶりにイヤミがない。書き手の切実さなのか、ぐいぐい読ませられた。一人称であることを戦略的に活用していると感じた。ラストは母親の話に収束したが、小さくまとまってしまった感があり残念。終わってしまったことを語るだけでなく、なにか事件が起きて欲しい。コンサートの枠組みを壊してでも飛躍があればよかったのに。どれか一本選べと言われたらこの作品と思ったが、大賞として強く推すほどの決め手はなかった。

『海の五線譜』は手練れの作品。老いや死への恐怖が「一番大事なことから忘れる」ことの残酷さとして語られる。絆すら奪われても残るものというささやかな希望で幕を閉じるのがいい。人物造形(特に男性)に暗部がないのが印相的。女性から見た「都合の良い男性像」は意図されたものなのか。だとしたらもっと戦略として徹底すればいいのと思ったが、余計なお世話かも知れない。

『ブルーマウンテン号の卵と間違ひ探し』は逃亡する家族を海原のゴムボートに置き換えた。家族II船はよくある

置き換えであるが、潔く徹底していい。陸地に着いて船を降りるくだりがあっさりしていて残念。家族Ⅱ船なら書くべきなのはそこだろう。ただ作者の以前の応募作からは格段の進歩が見られる。今後に期待したい。

『あの町から遠く離れて』は三題噺と複数のラインをうまく収束させた。技術には感心するが、うまく収束させること自体に作者の興味が注がれているのではないか。ゴド待ち、アトムなど各要素の扱いが表層的。震災を軽く扱っているように見えるのが、東北の人間としてはどうにもひっかかる。

『ひみつ箱』はひと組の男女の破局から出会いまでを遡って描いたが、手法に既視感がある。勿体ない。ラストシーンはなかなか切ない。

## 前田司郎

(五反田団主宰)

嫉妬する作品はなかった。上手だなと思う作品はあったが、上手なのがばれてしまっただ駄目だと思う。ヘタクソなのに魅力的で、実は技術的に優れている作品が読みたかった。というか、結局僕自身の好みでしか評価できない。その辺は申し訳ないが、評論家ではないので容赦ねがいたい。今年は今作品に触れようと思う。

①『ブルーマウンテン号の卵と間違え探し』人工の狂気を感じた。好きになれない。きつとどんな人にも狂気はあると思う。作者のもつ、作者本人も隠したいような部分が見たい。

②『船の行方知らず』意味ありげな雰囲気漂っているが、意味を感じられない。面白くなりそうという予感だけで、そこから展開がない。設定に設定を重ねていくのではなく、設定を展開させていく筋力が必要なのでは。

③『ひみつ箱』会話はとても上手だと思った。けど、楽しんで時間を逆光するのかわからない。登場人物の二人が全く好きになれなかった。会話には物語を進めるための筋肉と、作品を魅力的にする贅肉が必要だと思う。贅肉がないと人物がただ物語を成立させるために存在してしまう。せっかく時間を遡っているのだから、過去に興味を抱かせてほしい。逆行することは後から思いついたのでは？逆行を生かせる設定を。

④『あの町から遠く離れて』最初面白そうだったが、既存のフィクションや出来事に仮託しすぎて、志が低いと思う。震災や原発の問題の扱い方も直接的過ぎてグサイと感じる。好きじゃない。技術は一番高いと感じた。ゴドーやアトムやゴジラを尊敬するなら、それを超える作品を書くことに尽力すべきでは？ 私見だが、虎の威を借りるべきではない。

⑤『チャットルームでなぐり合い!』おばちゃんが女子大生をやるとか、ネットの世界を芝居にしました感とか、悪い意味で古い。現代の事象を描きたいなら先端のものでなくてはいけないのでは?チャットルームって、今さら。

劇中にエクスキューズがあったが、わかってるならこのアイディアは捨てるべき。最初に浮かんだアイディアを無邪気にやりすぎ、もう少し疑った方が良いと思う。

⑥『めくじら尺』ごめんなさい。どうしても読めなかった。誰が誰だかわからない。話が全く入ってこない。一応読んだけど、全然、わからない。僕の問題かも。他の審査員の方にお任せした。

⑦『Sの唄』笑かそうとしているところが全部キツイ。中学生的な感性が嫌。でも、そういう人でしたというオチだからいいのかな?しかし、これは実際みたら相当きつそう。他の審査員の皆さんと話しているうちに、確かに本作に一番「書きたい」という衝動のようなものを感じた。でも僕はやっぱり、笑わそうとしている感じが滲んでいるのが好きではない。

⑧ミュージカル『DAICHI』ふざけているのかと思ったら全くの無邪気だ。ひねりが無い。超素直。気持ちがいいくらい。意外と好きだけど、戯曲賞だから評価は出来ない。

⑨『カノン』非常に読みづらい。内容とは関係ないけど、

びびった。原稿用紙の書式にしているのかな?一度プリントアウトした物を自分で読んで書式を整えてほしい。俳優にも渡すのだから、読みやすい書式を心がけてください。内容の方もルールの説明が長い割に面白くないゲームをプレイしたみたいなきもち。軽い会話に面白みがない。「この芝居はこうやってみるんですよ」というルールは出来るだけ判りやすく短い方がよい。自分しかルールを知らないカードゲームを誰かに教えて遊ぶことをイメージしてもらいたい。

⑩『海の五線譜』作為を感じない劇作に好感を持って読んだ。しかし都合がよすぎる。新婚旅行のエピソードなど特に。迂闊にも、妻の元恋人の地元を旅行先に選ぶ夫。動けない程の腹痛を抱えた夫を放っておいて元恋人と会う妻とか。作者の都合に寄せすぎ。物語自体がお寺に置いてある教育絵本みたいに視野が狭い気がする。「物語」と「作者の都合」が内通し癒着している。両者は対立すべきだと思う。

僕は④と⑩を消極的に押した。偉そうなことばかり言ったが、その言葉は全部自分に返ってくるものと自覚せねばならぬ。



## 平成28年度 希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」の概要

希望の大地「北海道戯曲賞」は全国に門戸を開き次代を担う劇作家や優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合い、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的としています。

平成28年度は、前年度を上回る117作品の応募が全国からあり、第1次、第2次審査を経て優秀賞2作品が選ばれました。(大賞該当作品なし)

### 募集期間

平成28年6月1日(水)～9月2日(金)

### 応募作品数

117作品(道内23作品/道外94作品)

### 第1次審査会

実施日 平成28年11月1日(火)

会場 公益財団法人北海道文化財団会議室

### 第1次審査通過作品

「ブルーマウンテン号の卵と間違い探し」	イトウワカナ	(北海道)
「船の行方知らず」	合田団地	(京都府)
「ひみつ箱」	鈴木 穰	(東京都)
「あの町から遠く離れて」	土橋 淳志	(大阪府)
「チャットルームでなぐり合い！」	中野 守	(兵庫県)
「めくじら尺」	平石 耕一	(埼玉県)
「Sの唄」	藤原 佳奈	(東京都)
「ミュージカル「DAICHI」」	まき りか	(東京都)
「カノン」	村上 典子	(東京都)
「海の上線譜」	吉田 小夏	(東京都)

### 第2次審査会

実施日 平成29年1月22日(日)

会場 東京都内

### 第2次審査員

長田 育恵 (演劇ユニットてがみ座主宰)

斎藤 歩 (公益財団法人北海道演劇財団常務理事・芸術監督)

土田 英生 (MONO代表)

畑澤 聖悟 (劇団「渡辺源四郎商店」主宰)

前田 司郎 (五反田団主宰)

### 第2次審査結果

大賞作品 該当なし

優秀賞 「Sの唄」

「海の上線譜」

北海道戯曲賞受賞作品リーディング公演及びトークセッション  
(公益財団法人北海道文化財団アートゼミ事業)

実施日 平成29年3月5日(日)

会場 扇谷記念スタジオシアターZOO

リーディング公演

演出 斎藤 歩

出演者 高子 未来、西田 薫、堀田 淳之輔、山野 久治、山本 菜穂、  
横尾 寛、渡辺 ゆば

トークセッション

受賞者 藤原 佳奈 吉田 小夏

審査員 斎藤 歩 前田 司郎

入場者数 53名

協力 公益財団法人北海道演劇財団

表彰式

実施日 平成29年3月16日(木)

会場 公益財団法人北海道文化財団アートスペース



トークセッション



表彰式

希望の大地の戯曲

# 北海道戯曲賞

平成28年度受賞作品集

---

発行日 平成29年3月

発行 北海道舞台塾実行委員会

(北海道、公益財団法人北海道文化財団)

〒060-0042

札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F

(公益財団法人北海道文化財団内)

TEL 011-272-0501 / FAX 011-272-0400

デザイン 中西印刷株式会社  
印 刷

---